

「断絶」という手法

—ジェームズ6世（1世）の*Lepanto*を巡って—

横 田 保 恵

To the King His Maiestie.
Is any penne so rich in poetrie,
As to pourtray thy matchless Maiestie?
Can mortal wight conceit thy wortiness,
Which fills the world's capacious hollownes?
Lo then the man which the *Lepanto* writ;
Or he, or els on earth is no man fit.
Request him then, that he would thee commend,
Els neu'r thy worth may worthily be penn'd,
And yet, for all his Royall eloquence.
Scarce may he figure for they excellence.

T. B.

1603年にイングランド王位をも継承したスコットランド国王ジェームズ6世を迎えるために、上記の詩は書かれた (Nichols, 9)。この詩の筆者は、ある一つの文学作品、すなわち本文が1033行の長さの、1571年に起きたレパントの戦いを題材とした“The *Lepanto* of James the sixth, King of Scotland” (以下、*Lepanto*と略称) というタイトルの叙事詩を書いたとしてジェームズ1世を礼賛しているが、反面、彼が1603年までに書いた他の著作の名前はここでは挙げられていない。——あたかもこの詩の筆者が、*Lepanto*の作者であるからこそ、ジェームズ1世を歓迎しているかの如くに。この作品がここで言及されているのは、一つには、音韻的なレベルの理由によるだろう。この時点においてイングランドで出版されていたジェームズ6世（1世）の他の著作のタイトルは、ここに入れるには長すぎるものばかりである。だが、それだけが、この*Lepanto*という詩がここで触れられている原因なのだろうか——この叙事詩がイングランド人のもつ集合的記憶の琴線に触れ、接合していくものをもっていた可能性は、ないのだろうか。この詩が、「レパントの海戦」というカトリック教徒連合艦隊のオスマン帝国に対する勝利を礼賛したものである以上、これがそのままイングランド人の集合的記憶に訴えかけたとみなすのは乱暴すぎるだろう。従って我々は、「この詩は、イングランド人の集合的記憶に照らしたとき、どのように読み込まれうる可能性をもつものだったのか」と考えてみる必要がある。以下、本論では、「レパント」という戦場を「記憶の場」として立ち上げるこの詩が、どのような読み込み・読み替えを許すものであるか、その可能性について検討してみたい。なお、以下におけるこの詩の引用は、ニール・ローズ他編纂の*King James VI and I: Selected Writings*. (Aldershot: Ashgate 2003) を典拠とする。また、歴史上の人物の名はカタカナで、作品中の登場人物の名前は（混乱を避けるため）原語のまま表記している。

第一章 背景

まず、この*Lepanto*という作品の背景や従来の研究における論点を、以下の四点を踏まえて概観することから始めたい。その四点とは、1) この叙事詩の題材であるレパントの戦いとは、どのような戦いとして理解されるか、2) この叙事詩の出版形態を巡って指摘されている論点、3) 国王という権威をもつ人物が書いたこの作品における、「作者 author」と「権威・権力 authority」の関係はどうであるか、4) この叙事詩において、「他者 Other」は、どう立ち上げられているか、というものである。

第一に、この叙事詩が描いている1571年のレパントの戦いとは、スペイン国王・ローマ教皇・ヴェネチアが、三年間にわたり、ガレー船200隻・補給船100隻を集めて艦隊を形成し兵士50,000人をトルコ海軍のお膝元であるエーゲ海に派遣することを目的とした神聖同盟の軍隊と、オスマン帝国海軍がレパント湾で衝突した戦闘である (Monga, 24)。『オセロー』の背景でもあるオスマン帝国のキプロス島攻略や、その後のファマグスタに駐屯していたヴェネチア部隊の殺戮がこの同盟形成の契機となったが、しかし、ヴェネチアは、オスマン帝国との間の交易継続を求めており、神聖同盟への参加に消極的だった。最終的には、神聖ローマ皇帝カール5世の庶子でありヨーロッパ内における宗教戦争で名を上げていたオーストリアのドン・フアン指揮下にあるスペイン・ローマ教皇・ヴェネチアの連合艦隊が、1571年10月に、レパント湾でオスマン・トルコ海軍と衝突した。戦闘は一日で終了したが、船首・船尾に8つの銃砲および両側面に対人用武器を備えたガレアス船を備え、また、火砲の威力において勝った神聖同盟軍が勝利した (ジェフリー・パーカーによれば、神聖同盟側が1,815門の火砲を備えていたのに対し、オスマン・トルコ側は750門しか装備していなかった) (Parker 1996, 87)。多くの戦死者・捕虜を出した上に、少なくとも200隻ものガレー船を失ったオスマン・トルコ側は大損害をこうむったが (戦闘終了後、神聖同盟軍は、捕虜となったトルコ軍兵士らを処刑した)、これを受けて、トルコ支配下のギリシアやアルバニアにおいて反乱が発生した (Parker 1996, 88)。

同時に、レパントの海戦の背景を考察する際には、この戦いがオスマン帝国による地中海東部地域征服・支配の一段階だったという点を忘れるわけにはいかない。前述の通りこの戦いの敗北によりオスマン帝国の海軍力は低下したが、それはあくまでも一時的なものだった。「勝利した側が肝を冷やしたことに、七ヶ月経たないうちに、トルコ側は、軍事力を再び盛り返し、西洋諸国に対して大艦隊を派遣することができるようになった」 (Parker 1996, 89)。これに関連して、我々は、戦争状態 (war) と戦闘 (battle) を区別する必要がある——レパントの戦いは、ヨーロッパ諸国とオスマン帝国の間で継続していた戦争状態の一段階して理解される戦闘であり、この戦闘により戦争状態が終了したわけでは全く無い。1572年に教皇ピウス5世が死去した後、神聖同盟自体はほぼ解体し、ヴェネチアはトルコとの間で和平締結に向かったが (1573年)、スペインは、1578年にトルコと和平協定を結ぶまで、戦争状態を継続した。

このような戦争状態にありつつも、ヨーロッパ諸国とオスマン帝国の間では交易が継続されていた。神聖同盟への参加直前までヴェネチアがオスマン帝国との交渉を続けていたことは前述の通りだが、この交渉は、神聖同盟の他の参加者に対して秘密になどされていなかった (Monga, 25)。また、例えばイングランド・トルコ間関係について述べるならば、1570年代に入って、オスマン帝国及びアルジェリア・チュニジア・トリポリなど帝国から主権を付与された北アフリカの自立的地域とイングランドの間で、正式な外交関係が結ばれた。1575年以降には、イングランドは外交官をオスマン帝国に派遣し、イングランドとオスマン帝国は商業上の特権的条約 (commercial capitulation) を締結したが、その結果、1581年にはイングランドにおいてレヴァント会社が設立されている (Vitkus 2003, 26)。イングランドの貿易船は i) 積荷を積まずにイングランドを出発し、各地に寄港して物品を集め、最終的に地中海東部へ廻り現地のワインなどを買い付ける、ii) コーンウォール産の鉛や錫、イングランド産の織物などを積んで直接地中海東部に向かい交易する、といった二つのルートを取るのが普通であったが (Vitkus 2003, 32)、中継地となるアレ

ッポ・ダマスカス・アレキサンドリア・カイロ・アルジェ・チュニス・（北アフリカの）トリポリ・（シリアの）トリポリなどにはイングランド領事や仲買人が駐在し、イタリア・ギリシア・地中海東部を結ぶ交易網を維持していた（Vitkus 2003, 16）。

また同時に、オスマン帝国・北アフリカ諸国とヨーロッパ諸国の間には、アフリカ北岸及び大西洋におけるイスラム勢力・カトリック勢力・プロテスタント勢力それぞれの私掠船の活動から生じた軍事的・経済的関係が継続的に存在していたことも、忘れてはならない。当時、上記三勢力は相互に私掠船を派遣して、漁船や商船を襲いあい、積荷を奪うばかりではなく乗員を捕虜にしていた。捕虜は私掠船の本国に連行され、投獄されたり奴隷にされたりしたが、彼らから身代金を取ることは、この時期、この地域における一つの大きな経済活動となってもいた。「捕虜の身代金支払いには、常に、捕虜にされた側・捕虜にした側・仲介者の三者が関与していた。そして、仲介者は、捕虜にされた側・捕虜にした側の何れかと同国人である場合もあれば、そうでないこともあった。[中略]この仲介人は地中海全域にわたる相互ネットワークを形成したため、身代金が、ジェノヴァからパリ、ザンテからリボルノやカイロにいたる各地で、各国通貨を使用して支払われうようになっていた」（Vitkus 2001, 26-27）。身代金には、各地で一般から集められた義援金が充当された。例えば、1579年には、「アフリカで囚われているスコットランド人を救うために」アバディーンで義援金集めが開始され、1583年に至っても継続されており、国王ジェームズ6世がこの活動を監督するための委員会を設置したとの記事が、スコットランド枢密院の議事録に掲載されている（Vitkus 2001, 24）。また、1624年にはジェームズ1世（6世）に対しアルジェリアから、イングランド側が捕えたイスラム教徒の解放と引き換えにアルジェリア側の捕えたキリスト教徒を解放するとの通告があったが、1620年代を通じて、トルコ人捕虜たちは、イングランドの海港近くの監獄に収容されたり、海賊として処刑されたりしている（Vitkus 2001, 9-10）。つまり、この私掠船による拿捕活動はイスラム勢力・カトリック勢力・プロテスタント勢力——当時のアフリカ北岸・大西洋地域で経済活動をしている全ての勢力が、相互に行っていたものであり、一方的な活動ではない。実際、イスラム勢力側からすれば、拿捕を行うキリスト教徒達は十字軍を髣髴とさせる襲撃者に他ならず、また、同時代のイングランド人の中にも、「イングランド側の暴虐」を指摘する者があったことが指摘されている（Vitkus 2001, 10）。

このような継続的な関係性の中にレパントの戦いをおいてみるなら、どのようなことがいえるだろうか——換言するなら、このような関係性を承知していた同時代人にとって、レパントの戦いは、一体何を意味していただろうか。同時代人らのこの戦いに関する評価は、真二つに分かれていたことが指摘されている。一方には、i) オスマン帝国が急速に海軍を再建し、1574年にはスペイン領チュニスを攻略したこと、ii) 1573年にヴェネチアがオスマン帝国との講和に単独で乗り出し、キプロス譲渡・賠償金支払いを対価として通商関係を復活させたこと、などを根拠に、モンテーニュのように、この戦いの勝利には「倫理上 moral」または「象徴的な symbolic」意味しかないとみなす立場があった。また反対に、例えばジェームズ6世（1世）が*Lepanto*中で示しているように、この戦いを叙事詩の主題ともなりうる偉大な出来事とみなす立場が存在する（Appelbaum, 199-200）。以下、我々はこの*Lepanto*という叙事詩を検討の対象とするわけだが、上述のようなレパントの戦いの背景を常に念頭に置きつつ、議論を進めたい。また、その際には、「オスマン帝国とキリスト教世界が二項対立的に理解されるとき、その『キリスト教世界』とはほぼ例外なく西ヨーロッパを含意し、実際にはオスマン帝国の版図に組み込まれていた東方正教会は度外視されている」という指摘をも忘れるわけにはいかない（実際、この詩の中には「マケドニア人」が登場する）（Greene, 6）。ジェームズ6世（1世）がこの詩を書いた1585年時点でこの戦いは既に有名であり、スペイン語・イタリア語・ラテン語などで書かれた歴史書にも取り上げられ、また、イタリア語やラテン語によるこの戦いに関する著作が存在しており、ジェームズ6世（1世）がそれらを素材にこの叙事詩を書いたことが指摘されているが（彼がスペイン語は読まず、スペイン語の蔵書を持っていなかったため、この戦いを巡って書かれたスペイン語の叙事詩群を典拠としていない点は、付記したい）（Appelbaum, 186-7）、ここではむ

しろ、比較検討を目的として、アウグスブルクに拠点を置く豪商フッガー家がヨーロッパ各地から収集した情報を集めた史料である*The Fugger News-Letters. First Series.*に所収のレパントの戦いに関する公式ニュース、及び、殺人罪によりガレー船漕ぎの徒刑囚となり、レパントの戦いにも神聖同盟側の漕ぎ手として参加したフィレンツェ人アウレリオ・シュッティ (Aurelio Scetti) の『航海日記』(*The Journal of Aurelio Scetti: a Florentine Galley Slave at Lepanto.*) を、この作品と並行する史料として使用したい。

次に、本章冒頭で挙げた四つの問題点の第二点目、すなわち、この*Lepanto*という詩の出版形態に関して確認しておきたい。この叙事詩は1585年に執筆されたとされているが、1591年には詩集*His Majesties Poeticall Exercises at vacant heures.* (以下、*His Majesties Poeticall Exercises*と略称) に収録されてエディンバラで出版され、さらに1603年には、ジェームズ6世のイングランド王位継承を祝して、ロンドンで、新しい版で出版された。*His Majesties Poeticall Exercise* 所収の1591年版には「緒言 the Author's Preface to the Reader」が付されており、この詩のフランス語訳も収録されている。1603年版では出版地・出版者のみならず、例えばタイトルが'The Lepanto of James the sixth, King of Scotland'から'His Maiesties Lepanto, or, Heroicall Song, being part of his Poeticall exercises at vacant heures.'に変更され、左ページの欄外見出しが'The Lepanto'から'The Kings Lepanto'に差し替えられるなど、本としての体裁の変更が随所に見られる(この点に関しては、Herman, 86-87, 89-91に掲載された1591年版及び1603年版の図版、および、下記の説明を参照されたい)。この詩はジェームズ6世(1世)の詩作品中では恐らく最も人口に膾炙したものであり、上述のフランス語訳のほかに、1604年にはこの詩のラテン語訳が国王の資金提供により出版され、その他オランダ語訳やドイツ語訳も行われている(Bell, 176)。同時に、1585年・1591年・1603年というこの詩が世に出された三つの時点のそれぞれにおいてジェームズ6世(1世)がおかれていた状況を、この詩の発表のコンテクストとみなしうとする指摘がある点を、付言しておきたい。まず、1585年版のコンテクストとしては、i) ジェームズ6世(1世)がスコットランド議会で、国内において国王の権威が貴族・聖職者のそれを上回り、彼らを抑制しうると定めた法案を通過させたこと、ii) スコットランド国内における長老派制度を廃止し、聖職者らの怒りをかったこと、iii) 以前、国王に対して反乱を起こし追放されていた貴族ら(the Ruthven lords)が、大挙して手勢を率いて帰国したこと、iv) イングランド側、特にウォルシンガムとの関係、の四点がハーマンにより指摘されているが(Herman, 78)、この他に、v) ジェームズ6世(1世)が、スペイン・イングランド双方から干渉されない自由裁量を求めていたこと、vi) エリザベス女王はこの時点においてスペインとの戦争状態にあり、スコットランドの中立(内乱勃発など、スペイン側に干渉の口実を与えないことも含意しうる)を求めていた、の二点も付け加えることができるだろう(Lee, 64)。だが、このようにジェームズ6世(1世)が自らを中立的に見せる必要がある状況が変化した結果、1591年版には、「作品中の作者=T」がより「正しい読解」の道筋を読者に示す「緒言」が付されることとなった(Herman, 82)。そして、1603年、すなわちジェームズ6世のイングランド王位継承にあたっては、「国王の著作」という点を強調するに足る上記諸変更点を加えられて、再版されたわけである。

それでは、本章冒頭に挙げた第三点目、すなわち、この詩における「作者 author」と「権威・権力 authority」の相互関係から生じる問題に移りたい。この詩では、「緒言」と詩本体の双方においてこの詩の「作品中の作者=T」が登場する。また同時にこの詩の書き手が国王ジェームズ6世(1世)であることは表紙からも明白である以上、この「作品中の作者=T」と「権威・権力 authority」の源泉でありかつ「作者 author」たるジェームズ6世(1世)本人は、独特な緊張関係にあるといえよう。「この『作品中の作者=T』は、ジェームズ6世(1世)と直接的に結び付けられる存在か」という問題に対し、i) 両者を別個の存在として扱う立場、ii) 読者はこの「作品中の作者=T」が国王であることを念頭において読むことを要請されているとする立場、という真っ向から対立する二つの立場が存在する。前者の根拠としては、ジェームズ6世(1世)が自らの文学的または学問的な著作において、国王としての公的な立場からそれらを書いたのではない(または、そのような立場のみから書いたのではない)ことが明らかである点が挙げられて

いる (Appelbaum, 192)。また、後者の根拠としては、1591年版の*Lepanto*の「緒言」において、この「作品中の作者＝I」が自らの地位や身分の高貴さを誇示しつつ語っており、従って、読者は、国王がこの「作品中の作者＝I」の背後に居ることを容易に理解可能であることが挙げられている (Herman, 82-83)。

後者の立場に立つピーター・C. ハーマンは、ジェームズ6世(1世)・エリザベス1世間で従来から取り交わされていたソネット群と同様の、政治的・外交的含意をもつ一種の政治的道具としてこの詩を位置づけることを前提としている。ハーマンによれば、ジェームズ6世(1世)は貴婦人に対する恋愛を主題とするペトラルカ的な外見をもつソネット群をエリザベス女王と取り交わし続けたが、これらの詩は i) 両国関係の維持、ii) スペイン・スコットランド関係の維持、iii) ジェームズ6世のイングランド王位継承、という三つの政治的目標を同時に達成するための政治的道具として使用されていた (Herman, 62-72)。だが、この*Lepanto*という叙事詩をそれらと同様の政治的道具と仮定するには、「作品中の作者＝I」を実際の書き手であるジェームズ6世(1世)として同定する際に、この詩が想定している読者 (intended reader) をも同定することが不可欠なはずだが、ハーマンがそのような作業を行っていない以上、この論点をそのまま受け入れることはできない。

反面、ハーマンは、1591年・1603年に刊行された諸版を1584年に出版された*The Essays of a Prentice in the Divine Art of Poesie*。(以下、*The Essays of a Prentice*と略す)との関連において相互検討し、それぞれの表紙や印刷形態の分析から、ジェームズ6世(1世)の作者としての自意識の変遷を跡付けている。以下、彼の議論を追ってみたい。まず、ハーマンは、これら諸印刷本の表紙における作品名・作者名の印刷のされ方を踏まえ、i) 最初に印刷に付された国王の詩集である*The Essays of a Prentice*の表紙には作者名が印刷されていない (Herman, 83)、ii) 1591年版の表紙 (*His Majesties Poetical Exercises*全体としての) では‘Majesties’という単語が最も大きく肉太活字で印刷されているが、*Lepanto*の部分の表紙においては、作品のタイトルが作者名よりも上に大きく印刷されている (Herman, 85)、iii) 1603年版では、この詩のタイトルが‘His Maiesties Lepanto, or, Heroicall Song, being part of his Poeticall exercises at vacant houres.’と変更され、この内、‘Maiesties’という単語が最も大きな活字で印刷されており、また、1591年版の本としての表紙とも異なってこの単語がそのまま一行で印刷されているので、必然的に、「国王がこの詩を書いた」ということが読者に印象付けられると同時に、1591年版では左ページの欄外見出しが‘The Lepanto’とされていたのに対し、1603年版では、‘The Kings Lepanto’に変更されている (双方とも、右のページの欄外見出しは‘Or, Heroicall Song,’とされており、変更は見られない) という三点を指摘している。

実際、1591年版の*His Majesties Poetical Exercises*の本としての表紙では、タイトルが全体で6段に分けられているが、そのレイアウトは「1段目：やや小さめの活字で‘HIS’、2段目：大きな肉太活字で‘MAIES’、3段目：1段目よりやや大きい活字で‘TIES POTEI’、4段目：3段目と同様の活字で‘CALL EXET’、5段目：1段目より小さな活字で‘cies at vacant’、6段目：5段目と同様の活字で‘houres.’」となっている。また、1591年版所収の‘The Lepanto of Iames the Sixt, King of Scotland.’の表紙において、このタイトルは全体で5段に分けて印刷されており、「1段目：やや小さめの活字で‘THE’、2段目：大きな肉太活字で‘LEPAN’、3段目：一段目よりはやや大きい活字で‘TO OF IAMES’、4段目：一段目よりも小さな活字で‘the Sixt, King of’、5段目：4段目と同様の活字で‘Scotland’」というレイアウトである (以上、Herman, 86-87に掲載されている図版を参照)。さらに、1603年版の表紙ではタイトルが7段に分けて印刷されており、「1段目：やや小さめの活字で‘HIS’、2段目：大きな肉太活字で‘MAIESTIES’、3段目：二段目より小さい肉太活字で‘LEPANTO,’、4段目：小さな文字で‘Or,’、5段目：1段目よりはやや大きく3段目よりは小さい活字で‘HEROICALL SONG,’6段目：1段目とほぼ同じ大きさの活字で‘being part of his Poeticall esercises’、7段目：6段目とほぼ同じ大きさの活字で‘at vacant houres.’と印刷されている (以上、Herman, 89に掲載されている図版を参照。大文字・小文字の別は、同図版に依拠)。このように各版における表紙のレイアウトの変化を観察する限り、段階的にジェームズ6世(1世)が、「作者 author」という態度を明確にしていっていったというハー

マンのこの論点は、首肯されるものである。

だが、この詩における「作者 author」と「作品中の作者＝I」の関係を考察する際には、上述のような観点からのみならず、この作品世界における「作品中の作者＝I」の機能をも検討する必要があると考えられる。しかし、従来の議論からはこの点が抜け落ちている。従って、我々はここで、「作品中の作者＝I」の登場する箇所に関して、個別に検討する必要があるだろう。「緒言」を除くこの詩本体において、「作品中の作者＝I」が継続的に登場するとみなしうるのは、i) 第1行目～第36行目、ii) 第581行目～第604行目、iii) 第761行目～第772行目、iv) 第917行目～第940行目、v) 第1017行目～第1032行目、の五箇所である（例えば第514行目のように「作品中の作者＝I」を主語とする文がいきなり説明中に挿入されることがあるが、それらはあくまで補足的で、この詩の構成全体には関係していないため、ここでの議論の対象とはしない）。

i)・v) はこの詩本体の冒頭と末尾であり、「作品中の作者＝I」を主語とする文が含まれ、それにより導き出された詩句であるという点で対になっている。また、v) は「天使の賛歌 CHORUS ANGELORUM」の一部である。では、この二箇所のそれぞれ一部を引用してみたい。

I Sing a wondrous worke of God,
I sing his mercies great,
I sing his justice here-withall
Powr'd from his holy seat.
To wit, a cruell Martial warre,
A bloody battelle bolde,
Long doubtful fight, with slaughter huge
And wounded manifold.
Which fought was in LEPANTOES gulfe
Betwixt the baptiz'd race,
And circumcised Turband Turkes
Recountring in that place. (1-12)

THUS ended was the Angels song,
And also heere I end:
Exhorting all you Christians true
Your courage up to bend,
And since by this defeat ye see,
That God doth love his name
So well, that so he did them aid
That serv'd not right the same.
Then though the Antichristian sect
Against you do conjure,
He doth the bodie better love
Than shadow be ye sure:
Do ye resist with confidence,
That God shall be your stay
And turne it to your comfort, and

以上の引用からも明白なように、この二箇所は単に「作品中の作者＝‘I’」が登場するのみならず、i) では救いの源たる神への賛美が、また、v) の大半の詩行では「そのような神により頼み続けるように」との「作品中の作者＝‘I’」による「読者＝‘you’」への勧誘が提示されており、一種、礼拝を連想させるような——「神の賛美への会衆への招き」で開始され、「祝福および会衆の派遣」で終了する終始一貫した形式をもつといえよう。また、ジェームズ6世(1世)自身が「緒言」で述べている言葉を引用するならば、v) の最後の八行は‘the Epilogue of the whole in the last eight lines, declares my intention in the whole, and explains so fullye my comparison and Argument’である(40-42)。従って、この言葉を想定して読むならば、ここにおいて、「作者 author」と「作品中の作者＝‘I’」とは、「この出来事(レパントの戦い)の真の意味を知る者」として同一化されているといえよう。さらに翻って考えるなら、そもそもi)において、この「作品中の作者＝‘I’」はこの出来事の真の意味を知っているからこそ、‘I Sing a wondrous worke of God, / I sing his mercies great, / I sing his justice here-withall / Powr’d from his holy seat.’(1-4)と歌いだすのではないだろうか。つまり、この詩の冒頭において、作者は既に、結論に到達しているのだ——「レパントの戦いの真の意味」という結論に。それでは、このi)とv)における「作品中の作者＝‘I’」は、全く同一の存在なのだろうか？

この点を考察する前に、まず、iv)そしてii)・iii)における「作品中の作者＝‘I’」を検討する必要がある。v)は、戦勝を祝す「ヴェネチア人の賛歌(CHORUS VENETUS)」の末尾に置かれている。この「ヴェネチア人の賛歌」は、冒頭部では「ヴェネチア人」が主役であるが、途中から「作品中の作者＝‘I’」が主語である詩行、すなわちv)に移行する。この箇所は全体として、「天使」を主役に開始され「作品中の作者＝‘I’」を主語とする文を中心とする詩行、すなわちv)に移行する「天使の賛歌(CHORUS ANGELORUM)」と同様の形態をもつといえるが、iv)では「ヴェネチア人の賛歌を聴きつつ筆者が眠り込んだら、天使の歌声が聞こえてきた」との言明により地上の出来事たる「ヴェネチア人の賛歌」が天上の出来事たる「天使の賛歌」に架橋されているのに比して、v)は、先述の通り、「作品中の作者＝‘I’」が読者に神への信頼を勧誘するものであり、両者の機能自体は全く異なる。しかし両者は「ヴェネチア人の賛歌(地上の出来事)の次に天使の賛歌(天上の出来事)を聴き、そしてこの出来事の真の意味を踏まえて読者への勧誘を行う」という形で内的連続性をもつので、この二つの箇所における「作品中の作者＝‘I’」を、ことさらに区分して考える必要は無いだろう。

さらに、ii)・iii)はどうだろうか。この二箇所は、いずれも戦闘場面中に挿入されている。以下、それぞれの箇所を引用してみたい。

But what? Me thinke I doe intend
This battaile to recite,
And what by Martiall force was done
My pen presumes to write,
As if I had yon bloodie God,
And all his power seene,
Yea to describe the God of Hosts
My pen had able beene:
No, no, no man that witnes was
Can set it out aright,
Then how can I by heare-say do,

Which none could do by sight:
But since I rashlie tooke in hand,
I must assay it now,
With hope that this my good intent
Ye Readers will allow:
I also trust that even as he
Who in the Sunne doth walke
Is colourd by the samin Sunne,
So shall my following talke
Some savour keepe of Martiall acts,
Since I would paint them out,
And God shall to his honour als
My pen guide out of dout. (581-604)

My pen for pitie cannot write,
My haire for horroure stands,
To thinke how many Christians there
Were kild by Pagane hands.
O Lord throughout this Labyrinth
Make me the way to view,
And let thy holy three-folde Spreit
Be my conducting clew:
O now I spie a blessed Heaven,
Our landing is not farre:
Lo good victorious tidings comes
To end this cruell warre. (761-772)

ii) の冒頭箇所では述べられているように、この戦いおよびそれがもたらしたものを主題に詩を書くのは、直接の目撃者ではない「作品中の作者＝I」にとり荷が勝ちすぎているようにみえる。「詩の作者」としてではなく「出来事の記録者」として自らを位置づける限り、この問題は、「作品中の作者＝I」にのしかかり続けることになるだろう。だが、「作品中の作者＝I」は、続く部分において、以下のようにしてこの問題を帳消しにする。それは、まず、「With hope that this my good intent / Ye Readers will allow」(595-596)だからである。さらに、「日差しの中を歩く者」の比喩(598-599)はどうだろうか。ここでは、「日差しの中を歩くこと」と「勇敢な出来事を描くこと」が並列された結果、前者において人が日光の影響を受けるなら、後者において人が勇敢な出来事の影響を受け、従って(たとえ本人の経験によるのではなく、聞き書きでしかないにしても)勇敢な出来事を、いかにもそれらしく歌い上げることができるとされている。そしてさらに、「神による導き」がこの部分の末尾で言及されるに及び、「叙事詩の書き手は詩人なのか、それとも記録者=歴史家なのか」という問いに繋がる上記の問題は、無化されてしまう。

さらに、iii) の箇所においてはどうか。ここにおいて「作品中の作者＝I」は、この戦闘の余りの惨禍におびえる存在として姿を現す。これは、単に戦闘が激しかったからのみならず、この戦闘において火砲が大々的に使用されたこととも関連する。また、16-17世紀、つまり火砲発達後の時代において書かれた詩では、火砲など「現代的な」武器を作品世界にどの様に取り込むかという問題が生じてきているこ

とが指摘されている。そもそも火砲を使用した戦闘では勇者による一騎打ちなど実質的に不可能なので、馬上で戦闘する騎士ではなく、徒歩で戦士たちが戦う古典的な叙事詩形態が多く取られるようになってきたが (Murrin, 13)、これに加えて、「火砲により殺害された人間をどう描くか (換言すれば、火砲で吹き飛ばされた人の死に様や、吹き飛ばされ手足が千切れた死体の姿を作品中で描くか否か)」といった問題が生じる。さらに、レパントの海戦のみならずアメリカにおける先住民との戦闘など同時代的な題材をそのまま主題化した同時期のスペイン語の叙事詩では、当然、火砲使用も詩の中に描きこまれているが、同時に、書き手たちが中世的・騎士道的価値観を維持しており、それを元に火砲使用に対する判断を下しているという指摘も存在する (Murrin, 123)。つまり、火器の発展が戦闘にもたらした変化が余りに根源的であったからこそ、「この変化自体を、同時代のものとしてそのまま作品世界中に取り込むか否か (これは叙事詩形式を選択するか否かという、形式選択の問題とも関係する)」「その変化を作品世界中に取り込む際に、どういう評価を下すか」という点で詩人たちが個別に判断を下さざるを得なかったのだといえるだろう。「火砲を使用した戦闘の惨禍」という感覚自体は *Lepanto* においても見られるが、この詩における戦闘の描写は、そう克明ではない。大砲の轟音や兵士の叫び声・呻き声、そして死傷者が多数出たことについては言及されるが、それ以上のことは述べられていないのだ。この点で、この詩は同時代の他の叙事詩と同じ立場にある。ただし、一箇所、火砲が吹き飛ばした人体を直接的に描いた箇所が——‘Jaw-bones and brains of kild and hurt, / Who wisht (for paine) to die’ (727-728) という描写が、この詩には存在する。頭が吹き飛ばされ、それでも生きているからこそ苦しむ兵士たち。この姿は、恐らく、この戦闘に参加した当事者ではないからこそ描けるものであるのだろう。いずれにせよ、このような直接的な表現は、この詩の中では他には見られない。そして、そのような遠まわしな表現が中心的であっても「作品中の作者=‘I’」にとっては十分恐ろしいものであり、ここでも「作品中の作者=‘I’」は神に導かれることにより、ようようのことで、先に筆を進め、この部分の締めくくりの四行、‘O now I spie a blessed Heaven, / Our landing is not farer: / Lo good victorious tidings comes / To end this cruell warre.’ (769-772) において、ついに「作品中の作者=‘I’」は、「神に導かれて進むべき目的地を知っており、それを読者に示す存在」として——換言すれば、神と他の人間とを媒介し、神意を他者に明らかに解き明かしていく仲介者として——姿を現す。

以上の点を踏まえるなら、この作品世界における「作品中の作者=‘I’」は、一貫した存在であるといえよう。この戦闘の当事者ではないこの人物は、しかし、この戦闘がもつ意味を「知って」おり、神に導かれこの戦闘を叙事詩として描くことを通じて、いわばそれを追体験し、この戦闘の勝利を通じ御心を示される神に依り頼むよう読者を勧誘する。だが、この詩が開始する i) の時点における「作品中の作者=‘I’」と、この詩を書き終え、この戦闘を追体験し終えた瞬間である v) における「作品中の作者=‘I’」を全く同じ存在とみなすわけにはいかないだろう。「神の御心」により「正義の戦争」とされた戦闘を追体験することにより——日の光に身をさらした者と同様、この戦闘に、いわば自らの身をさらしたのだから——その影響、つまり神の恵みによる影響を、v) の時点の「作品中の作者=‘I’」は、より深く身に受けているのである。従って、v) における「作品中の作者=‘I’」は、i) における「作品中の作者=‘I’」が、螺旋を描くようにして一段階上昇した存在であるといえるだろう。神意に導かれ、この戦闘を追体験しつつ詩を描く「作品中の作者=‘I’」は、あたかも巡礼者の如く、神の恵みの場に向けて螺旋を描きつつ接近し、その行動を通じて読者をも同じ方向へと招くのだ。

では、このように一貫した特徴をもつ「作品中の作者=‘I’」は、「緒言」における「作品中の作者=‘I’」、さらには実際にこの詩の「作者 author」であるジェームズ6世 (1世) とどう関連するだろうか。先述のように、この詩における「作品中の作者=‘I’」の声を「作者 author」であるジェームズ6世 (1世) の声と切り離して理解する立場がある。そして、このような理解も可能ではあろうけれども、ここでは、この三者を連続させて理解したい。それはまず、詩本体における「作品中の作者=‘I’」がレパントの海戦の主役の一人であるドン・フアンに対して取っている距離に関して、「緒言」における「作品中の作者=‘I’」が、

‘And in a word: what so ever praise I have given to DON-JOAN in this Poëme, it is neither in accompting him as first or second cause of that victorie but only as of a particular man, when hee falles in my way, to speake the truth of him.’ (44-47) と弁解し補足しているからである。詩全体の構成などを説明するのみならず、このように弁解や補足もする「緒言」における「作品中の作者＝‘I’」は、詩本体における「作品中の作者＝‘I’」に対してメタの地点に立っている。だが、ドン・ファン個人に対する自分の評価は別として、この戦闘を叙事詩として描ききることをまず第一義とする立場を「緒言」における「作品中の作者＝‘I’」が取るので、この両者は、内的連続性を与えられていると考えられる。そして、上記引用箇所には、‘For as it becomes not the honour of my estate, like an hireling, to pen the praise of any man: So it becomes it far lesse the highnes of my rancke and calling, to spare for the feare of favor of whomsoever living, to speak or write the truth of anie.’ (47-50) という言明が続いている以上、我々は、ハーマンと同様に、「緒言」における「作品中の作者＝‘I’」を「作者 author」たる国王ジェームズ6世（1世）と連続させて理解することが可能であるが、それは、上記のように詩本体における「作品中の作者＝‘I’」と「緒言」における「作品中の作者＝‘I’」が連続していると考えられるなら、この三者を切り離して理解するわけにはいかないからだ。

また、このように考えるとき、先に指摘したこの詩本体における「作品中の作者＝‘I’」がもつ性格——神と人間の媒介者として自らを提示する性格は、例えば1604年のイングランド議会開会演説中でイングランド・スコットランドの合同問題に関して述べる際にジェームズ1世（6世）が使用したレトリック中でも見られる点を指摘することが可能である。この演説中の合同問題を主題とした部分で、彼は神意に関して五回言及しているが、そのうち一箇所を以下に引用したい。

And as God hath made *Scotland* the one halfe of this Isle to enjoy my Birth, and the first and most vnperfect halfe of my life, and you heere to enjoy the perfect and the last halfe thereof; so can I not thinke that any would be so iniurious to me, no not in their thoughts and wishes, as to cut asunder the one halfe of me from the other. (Sommerville, 137)

この箇所において、ジェームズ1世（6世）は、イングランド・スコットランド合同を「神意」であるとし、それに添って判断するように聴衆を促している。この際に彼は、自分を「神意の体現者・開示者」として神と聴衆の中間に置き、両者の媒介者となって、「神意」がこの世で実現することを求めている。このような特徴は、ジェームズ1世（6世）の他の演説でも確認可能な特徴だが、非常に王権神授説的な言説であると同時に、先に指摘した*Lepanto*における「作品中の作者＝‘I’」と類似性をもつものであるといえよう。確かに、「神意の媒介者・開示者」として自己を提示する*Lepanto*における「作品中の作者＝‘I’」は、王権神授説的な言説を表立って提示してはいない。だが、そのような意識が暗黙のうちにも書き手の側に存在する可能性を排除せずに先に引用した「緒言」中の文章を読み直すなら、ここでの文意が、王権神授説的な、聖俗におけるいかなる上級権力も認めない君主像と容易に結びつきうるものが納得されよう。そしてこのように考えるなら、この「作品中の作者＝‘I’」が、「作者 author」であり、現実世界における「権威・権力 authority」の担い手たるジェームズ6世（1世）と接合しているとみなすことは十分に可能なのだ。

以上、本章冒頭で挙げた1)～3)の問題、すなわち、「レパントの戦いの位置づけ」「この詩の出版年・形態に関して従来指摘されている問題点」「『作者 author』と『権威・権力 authority』の関連、特に作品本体・『緒言』における『作品中の作者＝‘I’』の位置づけ」という問題を取り上げてきた。最後に、4)の問題、すなわち、この詩における「他者 Other」の立ち上げを巡る問題に関して、従来の議論を概観しておきたい。この作品が「神により導かれた作品」として設定され、その中で「神の恵み」としてレパントの戦いにおける勝利が描かれている以上、この詩がこの戦闘を「正義の戦争」とみなしていることは明白であり、この詩と同時代における平和論のかかわりに関する議論なども存在する (Appelbaum, 207-212)。また、

この詩中では、トルコ側がキリスト教世界に対して様々な「暴虐」の限りを尽くした結果としてこの海戦が起きたことになっているのだが（この点に関しては第三章で検討する）、その際にオスマン・トルコ側を「動かしている」のは、「悪魔」である。従って、ここではまず、この詩においてはオスマン・トルコ側が、悪魔によって操られそのような戦いをキリスト教世界側に余儀なくさせた「他者 Other」とされており、この「他者 Other」によって「キリスト教世界」の立ち上げが行われている点を確認しておきたい。

また、前述の通りこの詩の主題が「カトリック勢力連合軍によるイスラム勢力への勝利」であるにもかかわらず、この詩の中では「カトリック Catholic」ではなく「キリスト教徒 Christians」という言葉のみが使用されている点は多くの論者が指摘しており、この点を踏まえて、この詩を一種エキュメニカルなキリスト教徒共同体を志向するものとして読む議論も存在する。「だが、共通の敵に直面して結束する『キリスト教徒』（ジェームズ王はここで、注意深く、宗派名を出すことを避けている）の表象においてより興味深いのは、この詩はジェームズ王が生涯を通じて心に留め続けたキリスト教国家の再統合（a reunited republica Christiana）へ向かうエキュメニカルな性格をもつ希望を抱いていたことを示している点だ。この叙事詩は、エキュメニズムを懇願するだけではなく、共同体を切望する叫びでもある。ヴェルギリウスを思わせる一節において[中略]、ジェームズ王はこの聖戦（crusade）に向けて行われた準備の様を巢の中でせっせと働く蜂の姿に喩えつつ生き生きと描くが、これは、非常に力強く、古典的で、かつキリスト教的な形で共同体への志向を喚起し、[読者に]命じていくものである」（Sharpe, 129）。確かに、イングランド国王として戴冠した後のジェームズ1世(6世)が提唱した「キリスト教国家の再統合」という理念を先触れするものとしてこの詩を読むことは、この部分だけ取り出せば、可能であり、魅力的である。だが、このような立場からは、この詩の締めくくりとなる「天使の賛歌」の後半部分が提起するある問題に——この部分が、単なる神への賛美と感謝のみならず、「キリスト教徒」を以下のように二つの群れに分けることを前提化して構成されている点をきちんと取り上げることができない。

「天使の賛歌」の後半で、第957行目から第1016行目にかけての部分は、i) 導入部（第957行目～960行目）、ii) 「正しくない形で神をあがめる者」と「正しく神を信じる者」を対比し、修辭疑問文により、後者を神が救われるのは当然であると述べる部分（第961行目～第1008行目）、iii) 結論部（第1009行目～第1016行目）という形で構成されている。まず、i)・iii)の双方を、以下に引用したい。

But praise him more if more can be,
That so he loves his name,
As he doth mercie shew to all
That doe professe the same: (957-960)

Sing praises of his mercie then
His superexcellence great,
Which doth exceed even all his works
That lie before his seat:
And let us sing both now and ay
To him with one accord,
O holie, holie, God of Hosts,
Thou everliving Lord. (1009-1016)

以上の引用から明白なように、この二つの部分は、「神への信仰を抱く者への慈悲」を感謝しそのような神を賛美する点で、呼応している。では、どのような者が、神の慈悲の対象なのだろうか。ii) では、この

「神の慈悲の対象」として、二つのグループが対比される。一つのグループは、以下のような言葉で表現される者たちである——‘thinks [sic] themselves are just’ (970)、‘doubt for to be sav’d’(974)、‘fondlie pray / To other Mediatours than / Can helpe them any way’(978-980)、‘worship God of bread, / (An errour vaine the which is bred, / But in a mortall head)’(986-988)、‘beare upon their brow, / The marke of Antichrist the whoore / That great abuser now, / Who does the truest Christians / With fire and sword invade, / And make them holie Martyrs that / Their trust in God have laid’(994-1000)。また、もう一方のグループは、以下のような言葉で表現されている——‘in / His mercies onlie trust’(971-972)、‘in their hearts / His promise have engrav’d’(975-976)、‘Who praiers do direct / Unto the Lambe, whome onely he / Ordained for that effect’(982-984)、‘onlie feare and serve, / His dearest Sonne, and for his sake / Will for no perrills swerve’(990-992)、‘bears upon their face / His speciall marke, a certaine signe / Of everlasting grace’(1002-1004)。これらの表現を通して、冒頭においては曖昧だった含意が次第に明らかとなり、最終的に、前者のグループがカトリック側、後者のグループがプロテスタント側を意味することが明白になる。「仲介者（守護聖人）に祈る」「練り粉の神を拝む」——これらは、宗教改革期に、何度といわずカトリック教徒達に浴びせかけられた悪罵である。そのようなカトリック教徒の「誤謬」をあげつらい、さらに「『真実のキリスト教徒』を殺戮し、殉教者ならしめている」と断罪するに至っては、カトリック教徒に対しエキュメニカルな希望をもちつつキリスト教国の再統合を夢見るジェームズ6世（1世）の姿など、読み込むべくも無いだろう。加えて、上述の通り、例えば‘For since he shewes such grace to them / That thinks themselves are just, / What will he more to them that in / His mercies onlie trust?’ (969-972) のように、修辞疑問文を通じて結合された形で、この二グループは提示されている。この部分の末尾の、「真実のキリスト教徒の殺戮」に関連する段になって初めて、それぞれ個別の修辞疑問文で表現されるが、そこまでの詩句が既に「カトリック側にここまで御慈悲を示されるのなら、プロテスタント側にはもっと深い御慈悲があるはずだ」という含意を明確化しているのだから、読者がこの二文を切り離して理解することなどまずありえないだろう。従って、上記 i) においては対象が「全キリスト教徒」であるかのように見えた「神の慈悲」が、実のところ、「プロテスタント側」のみを真の受け手とするものであることが、ii) を経て iii) に至った読者には明白である。そしてここで、「この詩において、実のところ、『他者Other』とされているのはイスラム教徒のみならず、カトリック教徒もそれに含まれるのではないか」という疑念が生じるのも事実である。

また、本章を締めくくる前に、従来きちんと指摘されていないある点を確認しておきたい。それは、この詩において、カトリック教徒・イスラム教徒の双方ともが、必ずしも一枚岩的な存在として描かれてはいないという点である。まず、この詩の中ではイスラム教徒側軍勢の一員としてキリスト教からの改宗者 (renegade) である OCHIALI Basha が挙げられている。大勢列挙されたイスラム教徒側軍勢の指揮官中、唯一否定的含意をもつ形容詞を冠され ‘Ochiali fell’ (516) と呼ばれる彼は、詩の後半で、自軍の旗色が悪くなった途端に傘下の部隊およびマルタ騎士団を率いて戦線離脱し、イスタンブルに向けて逃亡したとされる (845-848)。この詩におけるトルコ人・イスラム教徒は、「他者 Other」ではあってもその勇敢さが称えられており、同時代の演劇などに頻出するトルコ人表象・イスラム教徒表象とはやや違ふのだが、その中で一人、この Ochiali Basha は、どちらの陣営にも結局のところ所属しない、または所属し得ない存在として描かれているのである。

そして、この Ochiali Basha ほど明瞭ではないため従来看過されて来たのだが、キリスト教陣営にも似たような存在が見られる。それは、第301行目から第304行目において言及される、ガレー船の漕ぎ手達である。

The Forceats lothsomlie did rowe,
In Gallies gainst their will,
Whome Galley masters oft did beat,

ガレー船の乗員の大半は、その漕ぎ手である。1隻のガレー船につき、犯罪者・奴隷・志願者（借財で苦しんでいる者が主）から構成された漕ぎ手の数は約150から250名に上るが、乗船する兵士数は通常なら50名、警備巡航中でも50から100名までであり、また、船長以下の乗員数も、50名前後が普通である（Monga, 10-11, 14-15）。ガレー船の使用が頻繁になればなるほど漕ぎ手の確保は大問題になり、例えば14世紀以降のヴェネチアは、ダルマチア、後にはクレタ島においても、漕ぎ手を徴募した（Greene, 58-59）。さらに、グリーンが典拠とするレーンの著書は、レパントの海戦時点で、ヴェネチア艦隊所属のガレー船110隻中でクレタ人を漕ぎ手とするものが30隻あったと指摘している（Lane, 369）。このように、ガレー船の漕ぎ手の徴募という問題には、その海軍を保有する国のもつ対外関係、特に被支配地との関係とが絡んでくるのであり、当然ながら、そのような海軍は一枚岩ではない。この後の第313行以下で、「キリスト教側軍勢内に不和が起こったが、鎮められた」と述べられるが、それが‘Preferring wisely as they ought, / The honor of the Lord, / Unto their owne, the publicke cause, / To private mens discord.’（317-320）と表現されていることを想起するならば、このガレー船の漕ぎ手らは、自発的に‘publicke good’を尊重するわけではない存在として描かれているともいえよう。反面、第709行目以降で‘Yea even the simple forcasts fought / With beggars boltes anew, / Wherewith full manie principall men / They wounded sore and slew’（709-712）と述べられてもいるように、彼らは戦闘の行方に関心な存在として造形されていない。

従ってこの詩において、ガレー船の漕ぎ手らは、キリスト教側軍勢から単純に排除されているわけではないのだ。実際のところ、奴隷や志願者、そして犯罪者といった社会の下層に属する人々にとって、‘publicke good’すなわちこの戦闘に際してキリスト教側が掲げる大義名分が何であれ、自分のおかれた状況を改善することのほうが大事であったろうことは想像に難くない。実際、戦闘開始以前のドン・フアンの約束に従って、キリスト教徒の奴隷・トルコ側ガレー船の漕ぎ手として使役されていたキリスト教徒奴隷らが解放された記録が残っている（Monga, 9）。そしてここから、この戦闘に参加した各人の参加理由が、それぞれの出身階層や立場により規定されている可能性をこの詩の「作者 author」たるジェームズ6世（1世）がまるで考慮していないと指摘しうるだろう。反面、乱戦の描写において、「ガレー船の漕ぎ手たちが戦闘に参加し、彼らの使用した飛び道具によって主だった人々が殺傷された」ことが‘even forcastes’と強調されている点などから、この「作者 author」は階層性自体を自明の前提としていないと考えられる。従って、この「作者 author」たるジェームズ6世（1世）は、「階級制度」を承知しつつも、それを「支配・被支配」という問題と結合させて提示してはいないといえるだろう。その結果、この詩においてガレー船の漕ぎ手らは、キリスト教徒側軍勢という共同体の中とも外ともつかない位置、まさに周縁上に位置を占める。そして、このような彼らの周縁性は、先にも一部引用した、以下の部分からさらに明示される。

The beggars boltes by forcastes casten,
On all hands made to flie,
Jaw-bones and braines of kild and hurt,
Who wisht (for pain) to die: (725-728)

先述の「火砲使用による戦争の惨禍」という同時代の叙事詩に共通する感覚は、この詩においてはこのように、この戦闘に参加していたガレー船の漕ぎ手たち——‘publicke good’を「共有する」神聖同盟側軍団内にあって「周縁的な存在である」彼らによって引き起こされる「惨禍」として描かれるのである。

以上のようにこの詩では、キリスト教側軍勢・イスラム教徒側軍勢の双方ともが、一枚岩ではない存在として提示されている。また、先述のように、この「キリスト教徒側」という集団が「カトリック」「プロ

テストメント」の二派に分けられ、「作品中の作者＝I」であり「作者 author」たるジェームズ6世（1世）が自らを後者と同化させていることも、この詩の末尾の「天使の賛歌」場面に至るまで、明確にはされていない。だが、それでもなお、この詩においては、「他者Other」の立ち上げが、確실히行われている。それは、どのようにしてだろうか——この点は、第二章においてこの詩本体の全体的構成を検討することを通じ論じたい。

さらに本論では、この*Lepanto*という詩を読む際に、歴史家ピエール・ノラが中心になって推し進めたフランス史における一つの流れ、つまり、「記憶の歴史学」という概念を参考にする。谷川稔氏の言葉を借りるなら、この「記憶の歴史学」とは、「復元でも再構成でもなく、『再記憶化』なのである。それも『過去の想起』としての記憶ではなく『現在の中にある過去』の『総体的な構造としての記憶』だと主張される」（ノラ、4）。本論では、単なる叙事詩としてのみならず、ジェームズ6世（1世）が生きたまさにその「現在」において、彼が、彼なりの視点から紡ぎ出した「記憶の歴史学」的営為の産物として——彼の生きるその時々「現在」を計り介入する道具とするために歴史的事象である「レパントの戦い」を言説化した結果としても、この*Lepanto*という詩を読解することを前提としたい。それは、この視点に立つことで、「この詩の末尾に登場するレパントの戦いにおけるイスラム勢力とカトリック勢力の関係性をカトリック勢力とプロテスタント勢力の関係性の雛形として捉える言説が、ジェームズ6世（1世）自身にとって何らかのアクチュアリティをもっていた」という理解を前提とした議論展開が可能となるからである（実際、このような理解は、先に指摘した「作品中の作者＝I」に付与されている「権威・権力 authority」の問題と連動する）。但しこの際に、ノラ的な「記憶の歴史学」とジェームズ6世（1世）がこの詩を書く営為とを明らかに分かつ一点に留意しておく必要があるだろう。それは、*Lepanto*という詩が上級権力をもたない君主の作品であり、従って自らを「権威・権力 authority」と結び付ける方向性をもつ反面、「記憶の歴史学」とは、さまざまな人々に担われた記憶を対象とする多声的な歴史記述を要請するものだという点である。すなわち、国王の作品である*Lepanto*という詩は、必ずや何らかの形で上からの歴史 Historyと切り結ぶ存在だが、「記憶の歴史学」における歴史記述は、上からの歴史 Historyを解体する方向性をもつ。従って、ここでこの詩を「記憶の歴史学」的視点から読解することは、この詩を逆なでするものとなりうるだろう。だが、以上の諸点を踏まえて、レパントの海戦を「キリスト教世界にとっての歴史の雛形」として位置づけ寿ぐこの詩が、イングランド人のもつ集合的記憶にどう接合していったか暫定的に示すことを——この詩を逆なですつつ同時代の言説空間中に位置づけていくことを、本論は目的とする。

第二章 *Lepanto*の構造は何を提起するか

本章では、先述の通り、この詩の構造を概観しそこから浮上する三つの問題、すなわち、1) この詩の本体が入れ子になっている三重の枠により囲われた構造をもつこと、2) この詩において、トルコ側と神聖同盟側が対にされて言及されること、3) この詩の戦闘場面におけるトルコ側・神聖同盟側に関する表現のあり方及び固有名詞の取り扱い方、の三点を検討したい。

まず、この詩の全体的構造について確認したい。前章で検討したこととも関連するが、この詩の構成は、以下のようになっている。

- i) 第1行目～第36行目： 筆者による歌い出しと、神への請願
- ii) 第37行目～第92行目： 天上において、キリストと悪魔とが対決
神、大天使ガブリエルをヴェネチアに派遣
- iii) 第93行目～第192行目： レパントの海戦直前の「ヴェネチアの様子」
- iv) 第193行目～第320行目： 神聖同盟軍結成→軍の構成→出発→軍内部の不和の解決
- v) 第321行目～第356行目： 同時期のトルコ側の情景→トルコ側、キリスト教側を見くびりつつ出発

- vi) 第357行目～第380行目： 神聖同盟軍、レバントに至る
- vii) 第381行目～第424行目： 同時期の天上の様子→神、両陣営の罪の重さを天秤で量る（キリスト教側の罪の方が軽い）
- viii) 第425行目～第504行目： 神聖同盟側の戦闘準備→武具などの準備→各翼への指揮官や兵員の配置→総指揮官による激励演説
- ix) 第505行目～第556行目： トルコ側の戦闘準備→各翼への指揮官の配置→総指揮官による激励演説
- x) 第557行目～第760行目： 日が昇り、戦闘開始→砲撃により戦闘開始→「作品中の作者＝I」を主語とする描写→火砲の応酬と多数の死傷者についての描写→ガレー船による戦闘の描写→各人が入り乱れ戦うさまの描写
- xi) 第761行目～第772行目： 「作品中の作者＝I」を主語とする描写（「余りの恐ろしさに筆を進められない」）
- xii) 第773行目～第864行目： 戦闘の帰趨→神聖同盟側総指揮官に対する評価→戦闘描写→神聖同盟側指揮官、トルコ側旗艦に打ち入る→マケドニア兵がトルコ側総指揮官Ali Bashaを打ち取る→Ochiali Bashaを除くトルコ軍、踏みとどまって戦闘を継続→戦果（「どれくらい多くのキリスト教徒がトルコから『解放』されたか」）→神聖同盟側総指揮官への賛賞と、彼の「突然の死」への哀悼→夜になり、全てが眠りにつくさまの描写
- xiii) 第865行目～第880行目： ヴェネチアに戦勝報告がもたらされ、人々が歓喜するさまの描写
- xiv) 第881行目～第940行目： ヴェネチア人の賛歌
- xv) 第941行目～第1032行目： 天使の賛歌

以上の構成が示すように、この戦闘の「原因」からこの詩は開始され、「この戦闘がもつ意味」の開示によって締めくくられている。また、i)とxv)が「作品中の作者＝I」の登場する部分として対応している点は前章で検討したとおりだが、この詩は、この「作品中の作者＝I」を主語とする二つの部分で作られた枠の中に、さらに、「天上の様子」を巡る二つの部分すなわちii)とxv)（の前半）によって作られた一種「ヨブ記」的な物語構造をもつ枠、さらにその中に、ヴェネチアという都市国家を巡る二つの部分によって作られた枠が入れ子になって入っているという構造をもつ。従って、従来の読解では、この詩の主人公は神聖同盟側総指揮官のDon Joanだとみなされているが、ヴェネチア側を主人公として読みかえることも十分可能な構造であるといえよう。この点は、この詩本体の全体に対する戦闘自体を描写した箇所割合がおよそ三分の一に過ぎず、「レバントの海戦」のみをこの詩の主題としDon Joanを主人公とみなすには余りにも少ない点からも確認できる。いずれにせよ、この詩において、戦闘場面自体の描写と、その他の「前後関係」や「ヴェネチア人の賛歌」「天使の賛歌」、そして「作品中の作者＝I」を主語とする詩行のいずれれもが同等の重みをもつものとして扱われるべきであると、確実にいえるだろう。そして、この三重の枠の中、iv)からxii)までにおいて、「レバントの戦い」という出来事の沿革が時間の流れに添って提示されているわけである。

さらに、「レバントの戦いの沿革」の提示のされ方自体にも、特徴がある。それは、iv)からxii)の部分において常に、神聖同盟側の行動とトルコ側の行動が交互に描写されており、どちらか一方の視点にのみ依拠した描写はこの作品中ではとりたててみられないということだ。具体的に確認してみよう。まず、iv)・v)では、神聖同盟側・トルコ側双方の艦隊の編成と派遣が順次説明されている。続くviii)・ix)においても、神聖同盟側の戦闘準備や各翼への兵員配置、激励演説が説明され、続いて、トルコ側について同様の説明が提示される。さらに、x)・xii)は全体としての戦闘が描かれており神聖同盟側・トルコ側に分けけた表現はみられないが、ここでの戦闘描写において、以下の引用が典型的に示すように両者は常に対になって登場する。

Whill time a Christian with a sworde,
 Lets out a faithlesse breath,
 A Turke on him doth with a darte,
 Revenge his fellowes death,
 Whill time a Turk with arrow doth,
 Shoot through a Christians arme,
 A Christian with a Pike dooth pearce
 The hand that did the harme: (713-720)

ここで、神聖同盟側については一貫して‘Christian’と呼ばれているのに対して、トルコ側は、‘a faithlesse breath’、‘Turke’、挙句の果てには‘The hand that did the harme’と、余りにも縮減されて表象されている。ここにおいてトルコ人が「他者Other」とみなされているのは明らかだが、しかし、それでもなおこの両者が同じ土俵上に立つ者として提示されている点は、先にも何度か引用した、以下の箇所から指摘可能である。

The beggars boltes by forceats casten,
 On all hands made to flie,
 Jaw-bones and braines of kild and hurt,
 Who wisht (for pain) to die: (725-728)

前章で触れたように、同時代の叙事詩にも共有される「火砲が使用される戦争の惨禍」という感覚は、この詩ではガレー船の漕ぎ手たち——完全な被支配層、両軍の最下層に位置する者達により呼び覚まされている。神聖同盟側・トルコ側双方の兵士たちがいかに流血しいかに相互に傷つけあったとしても、彼ら相互の戦闘はこのような「痛み之余り死をも願う」人々の群れを作り出すものとして提示されてはいないのだ。従ってこの詩では、「トルコ人」のみならず「ガレー船の漕ぎ手」もが、最終的に「他者Other」化されているといえるだろう。つまり、「ガレー船の漕ぎ手」という最も周縁化された存在の提示による「トルコ側」「神聖同盟側」という正規の戦闘員集団の立ち上げと、「トルコ側」の「他者Other」化による「キリスト者集団」としての「神聖同盟側」の立ち上げとが複合的に行われているのである。

また、他の箇所においても、「トルコ側」と「神聖同盟側」は常に対にして提示されることにより差異化され続けている。例えばv)中の「オスマン帝国のスルタンはスパイを派遣して神聖同盟軍の規模を報告させたが、そのスパイは実際よりも少なく軍艦数を見積もり報告した」との記述によりトルコ側は当初から「虚報に踊らされる存在」として提示されるが、iv)の「神聖同盟軍の先遣隊が、トルコ軍逃亡の虚報を意図的に流した」との箇所に見られるように、神聖同盟側も実は虚報に左右されているのである。双方の箇所を以下に引用する。

Then spies were sent abroad, who tolde
 The matter as it stood,
 Except in Arithmetique (as
 It seemed) they were not good,
 For they did count their number to
 Be lesse than was indeed,
 Which did into the great Turks mind

A great disdainful breed:
A perilous thing, as ever came
Into a Chieftain's brain,
To set at nought his foes (though small)
By lyingly disdain. (329-340)

And VENIER (sent before)
Gave false Alarm, sending word,
The Turks had skowp'd the score,
That fifty Gallies quite were fled,
This word he sent express,
To make the Christians willing
To battle them address,
As so they did, and entered all,
(Mov'd by that samin slight.)
Into LEPANTOES gulfe, and there
Prepared them for the fight. (370-380)

後の引用箇所が登場する Venier とは iv) の中のメッシナにおいて神聖同盟軍が結成された場面に登場するヴェネチアの指揮官だが、そのような者が味方を煽る目的で流した意図的な虚報と、「実際よりも物の数を少なく見積もり、算術に長けていない」という「理由」により、虚報であるとの自覚も無くもたらされた虚報。両軍はともに虚報により左右されているが、しかし、その方向性は全く逆である。このような形で、両者は対にされることにより差異化されている。

さらに、viii)・ix) の二箇所は、まず各軍の兵力配置、次いで総指揮官の激励演説が提示される点で同じ構造をもつ（前者中の「戦闘準備の雑務」という描写は後者には存在しないが、これは両軍が全く同じに行うことであるから後者では省略されたと考えられよう）。神聖同盟側総指揮官の激励演説は間接話法的な形で提示されているが、(481-504)、トルコ側総指揮官の激励演説は直接話法が使用され、また、前者より長い (517-552)。このような相違点はあるけれども、ここでも両者は対にされて扱われているということができよう。

このように、この詩において「作者 author」たるジェームズ6世(1世)は、「トルコ側」「神聖同盟側」を常に対にして提示しており、「一方を描写したら他方に移る」という往還を繰り返しつつ、この詩は進行する。だが、一方の側にのみ視点を固定せず一種鳥瞰的な視点から描くというこの姿勢を元に「作者 author」が両者を完全に同等な存在として提示しているとは結論付けられない点は、これまでの議論が示すとおりである。

さらに、本章冒頭で提示した問題の三点目、つまり、この詩の戦闘場面における両陣営の表現のされ方および固有名詞の扱われ方について確認したい。まず、この詩の戦闘場面である x)・xii) 中で両軍の戦士達がどのような言葉で表現されているか確認してみよう。x) 中の戦闘描写は「戦闘開始直後の火砲の応酬」と「ガレー船をぶつけ合った後の、一対一の戦闘（この間、砲撃自体も継続されているが、それが中心ではない）」の二つが存在する。前者では両陣営は 'Christians' 'Turks' という言葉でのみ言及されており、後者ではこの他に、前述の 'faithless breath' (714)、'The hand that did the harme' (720) のような、トルコ側兵士を彼の体の一部に縮減する表現が見られる（神聖同盟軍の兵士に対してはこのような縮減は全く行われていない）。さらに、以下の引用のように、一見したところ両軍どちら側をも意味しうる表現もここ

ではみられる。

The valiant Knight with Cutlasse sharpe
Of fighting foe doth part
The bloodie head from bodie pale:
Whill one with deadlie dart
Doth pearce his enemies heart in twaine,
An other fearce doth strike
Quite through his fellowes Arme or Leg,
With pointed brangling Pike: (697-704)

「作者author」であるジェームズ6世（1世）がキリスト教徒である以上、この‘the valiant Knight’は恐らく神聖同盟軍兵士、また、‘fighting foe’はトルコ側兵士なのであろうが、その他の表現についてはどうだろうか。これらの‘one’、‘his enemy’、‘other’、‘his fellow’といった言葉は、両軍どちらとも言い難い、中立的な言葉である。また、この他に‘Martiall men’（751）という言葉も、どちら陣営の兵士か決定不可能な文脈で使用されている。従って、ここでは、両軍が入り乱れ相互に殺しあっている様のみが重点的に描かれていると考えられよう。さらにこの場面では、個々の人物の名前は一切出てこない。

これとは反対に、xii) の場面では、敵の総司令官Ali Bashaを倒そうとするDon Joanの行動を軸として筋が展開されており、彼ら二人およびOchiali Bashaという三つの人物名が登場する。Ali Bashaについては‘ALI-BASHA’（775など）、‘BASHA’（832）という二つの表記がなされ、また、Ochiali Bashaは‘OCHIALI’（845）とのみ表記されている。さらに、Don Joanは‘the Spanish Prince’（774など）‘the Generall’（813など）と表記されている。また、これらの人物名との関連により両陣営の一方に特定可能な表現の中で、神聖同盟側に属すものとしては‘Spanish side’（795）、‘[t]heir valiant foes’（808）、‘valiant fellowes carcasses’（811）、‘h[h]is Souldiers true and bolde’（818）が、トルコ側に属すものとしては‘their enemies’（812）、‘the faithlesse Host’（839）が指摘可能であり、従ってこの箇所においてはx) でみられた両陣営のいずれとも解釈しうる表現は存在しない。また、この箇所においても‘Christians’・‘Turkish’という言葉も（頻度は下がるが）使用されている。このように、xii) において、神聖同盟軍がスペイン軍と同列扱いられていることは明らかだが、だからこそ、Ali Bashaを倒した一兵士は、‘a soldier’ではなく、‘[a] MACEDONIAN souldier’（829）と表記される必要があったのだろう——マケドニアは、オスマン帝国とヨーロッパが接するバルカン半島に存在するのであって、スペインの傘下にあるのではないのだから。ついに一兵士の剣に倒れたAli Basha、武勲を立て損ねたDon Joan、そして味方の敗北を感じ取るや否や逃げ出すOchiali Basha。彼らの行動の軸にこの無名の一兵士の武勲が据えられている点を考慮するならば、ここで上記三人の固有名詞にどれだけの重みが付与されているか、疑問をもたざるを得ない。確かにxii) の箇所ではこの三者の固有名詞が登場しx) と比べて戦闘場面が活写されているが、出身地方のみが明記され固有名詞は剥ぎ取られた一兵士がこの場面における最大の英雄として実質的に提示されるとき、この詩が恐らく無自覚にはらむ、固有名をもつ英雄が入り乱れ、肉弾戦を繰り広げる「叙事詩」というジャンルの根幹を掘り崩しかねない可能性に気づかずにはいられないだろう。さらに、x) の場面で固有名詞が一切登場せずに戦闘場面が展開している点も、この疑念を強めるものとなるだろう。

本章では、この詩の構造を確認することを通じて、以上の三つの問題点を——この詩が三重の枠を持つ構造になっているが故に、単にレバントの戦いを描きDon Joanを主人公とする詩としてのみならず、ヴェネチアを主役とする詩としても読めるという点、この詩において神聖同盟軍とトルコ軍が常に対で提示される鳥瞰的な視点が採用されているが、それが同時に、この詩における「他者 Other」の立ち上げにかかわ

っているという点、そして、この詩中に存在する二つの戦闘場面の内、前半では固有名詞が使用されず、後半の場面においては人物の固有名が提示されるが重要性を付与されているとは言いがたいため、最終的に「叙事詩」というジャンル自体を裏切りかねない可能性をはらんだものとしてこの詩が成立している点を、検討して来た。次章においては、さらにDon Juan・Ali Bashaという二人の登場人物を比較検討することにより、「作者 author」たるジェームズ6世（1世）が詩本体中の神聖同盟側の表象に仕掛けた罟、換言するならば、「緒言」が付加される以前のこの詩においても、そして、この詩の末尾まで読み進んでいなくても、「カトリック陣営に対して距離を取った人物がこの詩を書いている」ことを読者に気づかせうる兆候について、考察を加えたい。

第三章 Don Joanと女性性

この詩は「理想的な軍事指導者」として造形されたDon Joanを主人公に（Herman, 78）、レパントの海戦を描いたものとして従来の理解されているが、前述の通り、実際のところ都市ヴェネチアを主役として読むことも可能である。Don Joanとヴェネチア。「個人」と「都市」という相違はともかく、この作品世界において、両者はどのように差異化され、結果として、両者をそれぞれ主役としてこの詩を読解する際に、どのような違いが生じるだろうか。以下、本章では、Don Joanの表象を中心に、1) この詩の作品世界中で彼と対の存在であるAli Bashaの表象との比較、2) この詩におけるヴェネチア表象とDon Joan表象の比較、3) この詩におけるDon Joan表象とアウレリオ・シェッティ（Aurelio Scetti）の『航海日記』や*The Fugger News Letters* 所収のレパントの戦いに関する公式報道等で描かれる実在のドン・ファンとの相違点、という三点を検討してみたい。

まず第一点目、この詩におけるDon JoanとAli Bashaの表象の比較から、開始したい。Don Joanは、この詩において、どのように行動しているだろうか。詩世界中の時間の流れに沿って、彼が登場し何らかの行動をとる場面を追ってみると、以下のようになる。

- i) 第206行目～第207行目： Don Joan、神聖同盟軍総指揮官としてメッシナに登場
- ii) 第425行目～第428行目： 戦闘を前にして、旗艦のマストにマルスの旗を掲揚させる
- iii) 第465行目～第476行目： 戦闘を前にして、自軍の配置について検討する
- iv) 第481行目～第504行目： 戦闘直前に、自軍の戦艦の間を漕ぎまわって激励演説を行い、歓呼の声がそれに応じる
- v) 第797行目～第828行目： Ali Bashaの旗艦に、味方の将官らと乗り込むが、一度目はAli Bashaによって撃退される。だが、再度のりこむ
- vi) 第837行目～第838行目： マケドニア人兵士が殺害したAli Bashaの頭部を切り取って旗艦のマストにはりつけにする
- vii) 第857行目～第860行目： Don Joanの早すぎる死についての記述

それでは、Ali Bashaは、どのような行動をとるものとされているだろうか。彼の場合は、以下のようになる。

- ① 第509行目～第516行目： オスマン帝国海軍の総指揮官Ali Basha登場。
- ② 第517行目～第556行目： 戦闘直前に全軍を前に激励演説を行い、歓呼の声がそれに応じる
- ③ 第805行目～第812行目： Ali Basha、自らの旗艦へのDon Joanによる一度目の攻撃を退ける
- ④ 第823行目～第836行目： Ali Basha、自らの旗艦へのDon Joanによる二度目の攻撃をしのぎ切れなくなったところで、マケドニア人兵士の剣に倒れ、戦死

以上のように、Don Joan側の ii)・iii) の行動を除いて、彼ら二人は全く同じ行動パターンを取らされていることが明白である。では、その行動の「内実」に関しては、どの様に描かれているだろうか。

Don Joanは最初に登場するとき、‘DON JOAN d’AUSTRIA [. . .] / Their Generall great’ (206-207) と表現されている。それに比してAli Bashaは、‘For PORTAV BASHA had in charge, / To governe all by land, / And ALI-BASHA had by Sea / The onely chiefe command. / These BASHAAS in the Battaile were, / With mo than I can tell, / And MAHOMET BEY the right wing had, / The left OCHIALI fell.’ (509-516) と、トルコ軍の陣容を紹介する箇所において最初に登場する。このように前者が単なる指揮官として紹介されているのに比して、後者は勇敢な武将として読者に提示される。だが、これ以降における両者の提示のされ方はどうなっているだろうか。

まず、彼らが各自行う激励演説はどのような形で構成され、また彼らは、どのようにそれを語る者として提示されているだろうか。Don Joanが激励演説を行う際の様子は、‘Did row about them all, / And on the names of speciall men / With loving speach did call’ (482-434) と表現されている。軍艦の間を船で漕ぎまわり、主だった者達に‘With glad and smiling cheare, / With sugred wordes, and gesture good’ (498-499) という風情で語りかけて、彼は演説する。だが、Ali Bashaは全く異なる。彼の演説は、‘visied all / With bolde and manly face, / Whose tongue did utter courage more / Than had alluring grace’ (517-520) と描写される全軍への怒号であり、まさに男性性 (masculinity) が丸出しになった姿である。そして、このAli Bashaにかんする引用箇所の最後の部分、‘Than had alluring grace’ という一節は、Don Joanとの対比が「作者 author」であるジェームズ6世 (1世) の念頭にあることを明示していよう。では、彼らの演説の内容はどうだろうか。まず、Don Joanの演説内容は以下の通りである。

Remembring them how righteous was
 Their quarrell, and how good,
 Immortal praise, and infinit gaines,
 To conquer with their blood,
 And that the glorie of God in earth,
 Into their manhead stands,
 Through just reliefe of Christian soules
 From cruell Pagans hands:
 But if the enemie triumphed
 Of them and of their fame,
 In millions men to bondage would
 Professing Jesus name. (485-496)

次いでAli Bashaは、オスマン・トルコ側を強者と自己規定し、この戦闘の勝利が新たな領域支配と富の収奪を可能にすることや、そして、万が一この戦闘で敗れた際に発生する被支配化について言及することから演説を開始する。冒頭の一部を引用したい。

This victorie shall Europe make
 To be your conquest pray,
 And all the rare things thereintill,
 Ye carry shall away:
 But if ye leese, remember well
 How ye have made them thrall,
 This samin way, or worse shall they

Demaine you one and all,
And then shall all your honours past
In smoke evanish quite,
And all your pleasures turn in paine
In dolor your delite: (533-544)

これはDon Joanの「聖戦」を訴える演説とは真反対に、戦闘における勝利と他者の富の収奪とを単純に直結する論理に根ざしており、この戦闘が私掠船同士の戦いに類したものであるかのような感すら読者に与えるものである。レパントの戦いは、聖戦だったのだろうか、それとも、私掠船同士の戦闘とそう変わらないものだったのだろうか。この詩全体の論調からするならば「聖戦」以外の何者でもありえないが、しかし、この戦いが当事者にとり、必ずしも「聖戦」ではなかった可能性をこの詩が提示しているのは興味深い（同時に、その可能性を口に出す役割がトルコ側に割り振られている点も、興味深い）。反面、神聖同盟軍が上記演説のこれ以前の部分では‘three Princes small’ (527) と描写されていたのに対し、上記引用箇所では、いつの間にか「ヨーロッパ全体」が期待されうる戦果として提示されている点は、注意を払いたい。些細なずれかもしれないが、ジェームズ6世（1世）がオスマン帝国の強大な力に対して感じていた圧迫感を髣髴とさせるずれである。

さらにAli Bashaは、「マホメットの見守りのもとで」全軍が勇敢に戦うよう檄を飛ばし（ここで「アッラー」ではなく「マホメット」が神であるかの如く提示されている点に関して、「作者 author」の側に、人間を神格化するとしてイスラム教徒を貶める意図があったかどうか、これ以外の箇所において「アッラー」や「マホメット」への言及が見られない以上判断し難い点は、付言しておきたい）、さらに、彼は以下のように述べる。

For nothing care but onely one
Which onelie doth me fray,
That ere with them we ever meet
For feare they flee away: (549-552)

この、余りにも男性性を誇示するような台詞をもってAli Bashaは演説を締めくくることが、これに対してトルコ軍兵士たちは、剣や槍を打ち鳴らして同意し、歓呼の声を上げた（553-556）。それでは、Don Joanの演説はどのような反応を引き起こしたのだろうか。以下に引用してみたい。

The SPANIOL Prince exhorting thus
With glad and smiling cheare,
With sugred wordes, and gesture good,
So pleas'd both eie and eare
That eveie man cryed victorie:
This word abroad they blew,
A good presage that victorie
Thereafter should en sew. (497-504)

ここまでくると、両者の違いは明白である。Ali Bashaとその配下の軍勢が非常に男性性を付与され、まさに軍隊そのものとして振舞う形で造形されているのに比べて、Don Joanは非常に女性化（effemination）さ

れた存在であり、また、彼の配下の軍勢は、それを喜んで受け入れている。

このDon Joanの女性化された表象は、v) の、Ali Bashaの旗艦に彼が最初に乗り込む場面においても指摘可能である。この場面を、以下に引用したい。

For even the Spanish Prince himself
Did hazard at the last,
Accompanied with boldest men
Who followed on him fast,
By force to winne the Turkish decke,
The which he did obtaine,
And entered in their Galley syne
But did not long remaine:
For ALI-BASHA proov'd so well,
With his assisters brave,
That backward faster than they came
Their valiant foes they drave,
That glad they were to skape themselves,
And leave behind anew
Of valiant fellows carcasses,
Whom thus their enemies slew. (797-812)

この場面におけるDon JoanとAli Bashaは、余りにも明確に対照的である。前者は‘valiant’ではあるが女性化された存在として、後者は戦闘において有能な「敵」として造形されている。そして、この箇所の冒頭に‘even’という言葉が挿入されることにより、これ以前の場面で描かれていた「勇猛な神聖同盟側軍勢」からDon Joanが排除されているかの如き印象を読者が受ける点は、付言する必要がある。そして、‘boldest men’を伴っての襲撃に失敗し味方の死体を残して退却する彼の姿は、女性化されている以上に直裁に無残である。そして、だからこそ、この直後の場面においてDon Joanは、‘boldned then with spite, / And vernisht red with shame, / Did rather chuse to leese his life / Than tine his spreading fame’ (813-816) と決死の覚悟をし、敵旗艦を再度襲撃するのである。彼はこのように「名誉」への渴望を媒介に女性性から脱却し、男性性の側に揺れ始めるが、しかし、彼ではなく名誉心に駆られたマケドニア人兵士がAli Bashaを殺害したため、この試みは失敗した。確かに彼はAli Bashaの頭部を切り落とし自分の旗艦のマストに磔にしたが、マケドニア人兵士の武勲により可能となった行動である以上、これにより彼自身が男性性を回復したとはいえないだろう。彼自身は、「敵将の首級を上げる」ことで自ら男性性を獲得するのに、単に繰り返し失敗しているのだ。彼が男性性を回復できたか否かに関してこの詩は表向き沈黙しているが、非常にその確率が低いであろうと、読者は感じるだろう。そしてこの点と関連して、本章冒頭部に挙げた二つ目の問題、すなわち、Don Joanとヴェネチアの表象の比較を行いたい。

この詩においてヴェネチアは、「神に選ばれた都市」として登場する。冒頭近く、天上の場面において、オスマン帝国を利用してキリスト教徒を苦しめる悪魔を前に、神は大天使ガブリエルを呼び、以下のように命じる。

Go quicklie hence to Venice Towne,
And put into their minds

To take revenge of wrongs the Turks
Have done in sundrie kinds. (89-92)

以上のように、この詩世界中で、オスマン帝国の「悪」を懲らす地上における剣として神が選択したのはヴェネチアであって、ローマ教皇やスペインではない。同時にこの詩では、当時、ヴェネチアはオスマン帝国の侵略を目の前に、非常な苦境に置かれていたとされている。ヴェネチアに関連する筋は、以下の順で展開する。

- i) 第119行目～第128行目： 大天使ガブリエル、神の命を受けてヴェネチアに現れ、人々を対オスマン帝国の戦争に向けて扇動する
- ii) 第129行目～第136行目： ガブリエルの言ったことが人々の間で口伝えに広がる
- iii) 第137行目～第140行目： ガブリエルの言ったことがついにヴェネチアの市当局にまで伝わる
- iv) 第141行目～第148行目： ヴェネチアがこの当時陥っていた「苦境」
- v) 第149行目～第184行目： その「苦境」に対するヴェネチア人たちの対応
- vi) 第185行目～第192行目： ガブリエルの扇動を受けて、ヴェネチアの人々が対トルコ戦争に積極的になる
- vii) 第193行目～第196行目： ヴェネチアを支援するために、神聖同盟の結成

このように、ヴェネチアに関する描写は、iv)・v)の箇所一度時間をさかのぼる形で構成されている。

では、このiv)・v)の時点でヴェネチアは、どのような状態に置かれていたのだろうか。彼らが置かれていた「苦境」とそれへの対応策は、以下のように説明されている。

The Turke had conquest Cyprus Ile,
And all their lands that lay
Without the bounds of Italie,
Almost the whole I say:
And they for last refuge of all,
Have moov'd each Christian King
To make their Churches pray for their
Reliefe in everie thing. (145-152)

この箇所では、オスマン帝国による海外領土への侵略がヴェネチアの「苦境」とされている。確かに、海外領土喪失は国家にとって大きな意味をもつ。だが、それが人々にとって一体どのような意味をもつ事象であったのか、この箇所は黙して語らない。実際問題として、地中海・アドリア海の島々の喪失は交易拠点・補給地の喪失を意味し、それに付随して、海賊や敵軍艦等による拿捕被害者の大量発生をも意味する。だからこそ現実のヴェネチアはオスマン帝国との恒常的な貿易活動を基盤とする相互関係を調整しつつ能動的にこの事態に対処し、従って神聖同盟への参加には消極的だったわけだが、この作品世界での描写は異なる。彼らは現実的対処の代わりに、「祈り」という形での援助をキリスト教徒共同体に求めた、とされている。また、この直後の箇所において「この当時のヴェネチア人の様子」が、「悲しみに満ち溢れ、涙を流すのみ」として描かれているが(153-160)この二つ、「祈り」という援助のみを依頼し、涙を流すだけの様を合わせて考えるなら、ここで提示されるヴェネチア人表象とは、現実のヴェネチア人たちが神聖同盟参加直前に見せていた能動性を全くそぎ落とされた受動的な存在、つまり集団として「男性性」を剥奪された存在として描かれていることが分かる。

しかし、風が吹いて水面に漣が立つ如く、大天使ガブリエルの語った、以下に引用した台詞はヴェネチアの人々を変化させた。

What doe we all? me thinke we sleepe:
Are we not day by day
By cruell Turks and infidels
Most spitefullie oppresst?
They kill our Knights, they brash our forts,
They let us never rest.
Go too, go too, once make a prooffe:
No more let us desist
To bold attempts God gives successe,
If once assay we list: (119-128)

この詩世界中では、上記の言葉が人々の口からこぼれだし、口伝えで伝わり、市当局をも動かし、さらには諸外国に対トルコ戦争への支援を依頼することを通じて、神聖同盟結成への契機となっていく。

His speaches spred abroad, made Towne
And Senat both so bent
To take revenge, as they implorde
The Christian princes ayd,
Of forces such, as easilie,
They might have spard and maid.
At last, support was granted them,
The holie league was passt,
Als long to stand, as twixt the Turkes
And Christian warre shoulde last. (187-196)

上記のようにこの詩では、ヴェネチアがまず「復讐」を決意し、他のキリスト教諸国に対して神聖同盟結成を提唱したかの如く描かれている。前述の通りこれは事実と相違するが、同時に、ここでヴェネチアが陥っていた「苦境」やそれに伴う男性性の剥奪が、神の導きによりはねかえされ、ヴェネチアが集団として男性的な存在に自己成型してゆく点は指摘しておきたい。そして、この点こそが、ヴェネチアとDon Joanを分かつものなのだ。この詩世界では、前者は戦いに赴く以前に男性性を身につけた集団として自己成型したが、後者は男性性獲得の途上にあり、彼が男性性を手にすることができたか否かが明瞭にされていないのは先述の通りである。だが、本章冒頭で指摘した問題の第三点目、すなわち、この詩中のDon Joanと実在のドン・ファンを比較するならば、彼の男性性獲得を巡る問題に、一つの答えを出すことができる。以下、この点に議論を進めたい。

現実のドン・ファンと、この詩作品におけるDon Joanを決定的に分かつものは、一体何だろうか。例えば、彼が行った激励演説は、*The Fugger News-Letters. First Series*. 所収の史料（1571年10月8日付の、神聖同盟側艦隊が送った通信の写し）によれば、以下のようなものだった。

Don Juan attired himself in a light suit of armour and boarded a small ship, called a frigate. Holding a

crucifix in his hand, he visited one galley after the other, appointing to each its proper place in the battle and exhorting the crew to fight valiantly against the arch-enemy of the Christian Faith. Not he, but Christ, who had died for us upon the Cross, was the Father of all, and the Patron of this Armada, and he hoped that they would find help and sustenance in His mercy. Thereupon the whole soldiery sent forth great shouts of jubilation and forthwith placed themselves in battle formation. (von Klarwill, 15)

ここでのドン・ファンは、十字架を手にした、非常に信仰深い軍事指導者として姿を現す。また、シェッティの記録では、どうだろうか。シェッティによれば、メッシナでシェッティらの艦隊と合流したドン・ファンは、9月15日に大ミサに出席し、また、自らが指揮するガレー艦隊を司教により祝福してもらっている (Monga, 112)。次いで、メッシナからレパント向かう途中で、彼は既に艦隊を四つの小艦隊（中心部隊・右翼守備部隊・左翼守備部隊・救援艦隊）に分け、それぞれに識別用の旗を与えるなど、具体的な準備を進めていた (Monga, 114)。そして到達したレパント湾において、戦闘直前の彼の様子は、以下のようであった。

Meanwhile, His Highness Don John prepared for battle, according to the plan. He did not want the enemy to discover his rescue squadron before the start of the battle, so he left it near the mountain. He then boarded his fregata and ran along the ships of his fleet, exhorting the captains of the galleys and the infantry to fight courageously, doing the same for soldiers and sailors of the galleys. He told them that that was the day all Christendom should show its power by destroying that damned sect and achieving a great victory. Meanwhile the enemies were laughing at the Christians, saying that they were going to kill them all; they could not, however, see all the Christian ships. (Monga, 117)

このように、シェッティの記録からは、緻密に計画を立て、敵には策略を仕掛け、精力的に味方を戦闘に駆り立てる軍事指導者の姿が浮かび上がる。*Lepanto*における女性性を多分に身に帯びたDon Joanとは大違いであり、従って現実のドン・ファンが備えていた軍事的能力などの彼が能動的を發揮しうる分野については沈黙し、女性性を多分に付与するという形でDon Joanが描写されていると、考えることができるだろう。

さらに、以下の二つの引用を、この詩における箇所をAli Bashaが戦死する場面と比較するなら、さらに大きな驚きがある。

Our general, Don Juan of Austria—whose achievements I should have reported first of all—rammed with his galley that of the Turkish commander, finally captured it, cut off the head of the Turkish Pasha with his own hand and placed it at the end of a spear of his own galley. (von Klarwill, 16)

In spite of that, Ali Basha's "Reale" kept defending itself with courage against our fury, for, as we said, it had been attacked by His Highness Don John and signor Marcantonio. The Christians proved to be much stronger than their enemies, for in a short time they killed all the 300 janissaries. A terrific wrath overtook Ali Bascià. When he saw himself overwhelmed and his galley destroyed, he killed himself, slashing his own throat, choosing to die rather than to be taken prisoner by the Christians. Two of his children, however, and other members of his retinue were captured. When the Turkish galleys saw that their own "Reale" had been taken, they were struck by terror and attempted to run away. (Monga, 120-121)

一体、先の「マケドニア人」はどうなったのだろうか。神聖同盟側艦隊の史料には、この人物は一切登場しない。また、シェッティの記録では、敵将アリ・バシャは自殺したとされている（但し、『航海日記』の編纂者が、この「アリ・バシャ自殺」説が同時代の他の史料により支持されないと指摘している点は、付言しておきたい[Monga, 121, n126]）。ここでこの三つの言説、すなわち神聖同盟艦隊の発した記録、ガレー船の漕ぎ手として神聖同盟艦隊に参加していた人物の記録、そして、この戦闘の経験者の手になるものではないが様々な史料・資料を踏まえて作り上げられた*Lepanto*という詩の三つを並べてみると、まさに、上からの歴史 History がもつ特質と限界を我々は感じずにはいられないだろう。この三つの言説はそれぞれ、「当事者の公式発表」「当事者の記録」そして「一切の上級権力をもたない国王が、神意に導かれて発した言説」として、「正当な」言説として自認しうる「根拠」そして「権利」をもつ。従って、ここで我々はむしろ、「神聖同盟側の発表においては、あくまでドン・ファンが敵将の首を自ら刎ねるという筋書きが求められていた」という点、また、作品世界中への「マケドニア人」の挿入は（例えそれを支持する史料が存在したとしても）、紛れも無く*Lepanto*の「作者 author」たるジェームズ6世（1世）の意図を反映しているという点を確認するべきだろう。換言すれば、この*Lepanto*という詩は、神聖同盟側が発した言説から逸脱する対抗言説として、また、「レパントの戦い」という出来事を、出来事それ自体として描くのではなく、時間的・空間的に離れた「今現在」まで継承され「今現在」において反復される記憶として機能させるために編成された言説、すなわち、非常に「記憶の歴史学」的な言説として形成されていると考えられるのだ。この詩は国王が書いた詩であるが故に「権威・権力 authority」と強く結びついた作品であり、同時に、同じ出来事を題材とした同時代の他の言説群中では対抗言説として位置づけられうるのだ。そしてこの時、先に第一章で「全ての上級権力を認めない、絶対君主的な存在」として読み込むことも可能であることを指摘した「作品中の作者＝I」が「緒言」中で発する「to speake the truth of him [=Don Joan]」（46-47）という言葉が、実に強い意味を帯びているであろうことは想像に難くない——誰一人として論駁することを許されない、対抗言説。ジェームズ6世（1世）がこの詩の中で提示する神聖同盟像、Don Joan像、そしてレパントの海戦の表象は、そのような特殊な対抗言説を構成する要素なのである。

そして、現実のドン・ファンと作中人物のDon Joanを分かち、もう一つの大きな相違点が存在する。この相違点は、一見したところジェンダー的なニュアンスを持たないのでここまでの議論では取り上げなかったが、この詩世界中の時間の流れと関連して彼に付与されたジェンダー表象と関連する機能をもつと考えるものである。それは、この*Lepanto*という詩の中に、「Don Joanの早すぎる死への哀悼」という一節が挿入されている点から浮上する問題だ。この一節を、その直前直後の詩行と合わせて以下に引用する。

When thus the victorie was obtained,
 And thankes were given to God,
 Twelve thousand Christians counted were
 Reliev'd from Turkish rod.
 O Spanish Prince whom of a glance
 And suddainlie away
 The cruell fates gave to the world
 Not suffering thee to stay.
 With this the still night sad and blacke
 The earth over shadowed then,
 Who MORPHEUS brought with her and rest
 To steale on beasts and men. (853-864)

この戦闘により解放された人々の描写の後、「Don Joanへの哀悼」が挿入され、そして「夜がきた」と続くこの配列は、一体どのような印象を読者に与えるだろうか。確かにドン・ファン自身、レパントの海戦以降、長くは生きていない。1572年に東地中海から呼び戻された後、1577年には低地地方での戦争の指揮を開始し軍功も立てたが、翌1578年に没している。従って、ジェームズ6世（1世）がこの詩を書いた1585年には既に彼は死去しているが、しかし、先の引用箇所がそのように理解しうる筋書きであるにとは言いがたい。「戦果」の後に「総指揮官の早すぎる死」が悼まれ「夜」が続くこの一節は、Don Joanがこの戦闘直後に死去したかのような印象を読者に与えうる。そしてこの点を踏まえるなら、「Don Joanは、この戦闘により女性性を脱し男性性を獲得しえた存在として描かれているか」という疑問に対し、我々は「否」と答えざるを得ないだろう。

「男性性」獲得の途上、まさにその宙ぶらりんなところで死去したかのようなこの詩のDon Joanは、従って、女性性を首尾一貫して付与され造形されていると考えられる。そしてこのように考えるとき、彼の率いる神聖同盟側艦隊は、例えばブルース・R・スミスが『ヘンリー5世』におけるイングランド軍に関して指摘する男性相互の同性愛的でもある友愛に依拠したのも、また、コッペリア・カーンが『アントニーとクレオパトラ』中のアントニー・シーザー間に読み取った、相互を意識せずにはいられない形で強く結ばれた男性同士の関係性でもなく、まさに擬似的な「女性」を間に挟んだ男性相互の絆に依拠したものとといえるだろう。擬似的な「女性」、すなわちDon Joanを皆で共有するからこそ——レパントの戦い直前、激励演説の場面において彼は、船に乗って各艦を巡り優雅に皆を励ますことにより、文字通り全艦隊に共有される存在として描かれている——結束し勇敢に戦ったとされるこの軍勢は、ホモエロティックな感情と男性同士のホモソーシャルな絆という、共存しにくいものが混在した形で造形されている。この詩中で、開戦直前に神聖同盟側軍勢が戦闘準備を整えている様を「巣の中の蜂の群れ」に喩えた箇所があるが(457-460)、Don Joanを群れの頂点に位置する女王蜂と考えるなら、まさにこの比喩は適切なものとなる。そしてこれは、先の「マケドニア人」と同様に、ジェームズ6世（1世）が一見曖昧な形で、しかし入念に神聖同盟側の公式発表等の枠組みをずらし組み替えつつ、対抗言説としてこの詩を構成したことの兆候として理解されよう。しかも、その対抗言説化が、この出来事の主役と通常みなされる人物の造形に託して提示されていることを想起するなら、我々は、この詩の「作者 author」であり「作品中の作者＝I」であるジェームズ6世（1世）が、この詩の末尾のみならず、中間部分にもカトリック勢力に対する自らの判断を滑り込ませていることに気づかざるを得ない。

以上、本章においては、*Lepanto*におけるDon Joanの表象を、Ali Bashaとの比較、ヴェネチアとの比較、そして実在のドン・ファンを巡る史料との比較を通じて検討してきた。その過程で、この詩が神聖同盟側の発したレパントの戦いに関する言説に対する、対抗言説として組み上げられている可能性が確認された。では、終章では、これまで指摘してきた論点を踏まえ、序章で提起した問題を——この*Lepanto*という詩が、イングランド人の集合的記憶とどのかかわりえたかという問題に対し、暫定的な答えを出したいと思う。

終章 「断絶」という手法

前述のように、*Lepanto*という詩の中で、Don Joanは女性性を強く付与されている。その彼を共有する集団である神聖同盟軍は非常にホモエロティックな感情の通底する、しかし表面上はホモソーシャルな集団だ。ホモエロティックな感情とホモソーシャルな絆。本来は共存しようも無いこの二つのものが混在するこの集団を統率するDon Joanは、彼自身、「女性性」「男性性」という二つの極の間を移動中の人物として造形されている。

Don Joanの女性性は、彼の演説は、彼の立ち居振る舞いに現れ、男性の集団である軍隊を纏める機能を

もっている。同時に彼は、Ali Bashaの旗艦を襲撃し、Ali Basha殺害自体には「失敗」したとしても、少なくとも、彼の首を切り落とし、マストに掲げることは可能な人物としても造形されている。そして、このような彼の両面を考えると、彼は、同時代において非常にアンビバレントな捉え方をされていたある女性、『旧約聖書』外典に登場するユデトを髣髴とさせる人物であるともいえるだろう。美しく着飾り、敵将を騙すことで彼の首を切り、祖国を救った女性であるユデトは、「国家の救済者」であると同時に、「強姦しようとした側を強姦し返す者」という、男性を女性化する存在としても解釈されうる人物である (Stocker, 16-17)。また同時に、図像学的には彼女は剣と男性の頭部を同時に手にもつ形で表現されるのが常なのだが、もし剣を手にしていなかったら、ユデトとサロメを区別することが困難になる可能性があることも、同時に指摘されている (Stocker, 18)。確かにユデトとサロメは、その行動の目的や「神による加護」の有無こそ異なれ、彼女らが取ったとされる行動パターンの次元では非常によく似ている。このようにユデトは、聖と悪、英雄性と犯罪性、そして男性性と女性性の双方に属す、境界線上にある人物として理解されうるが、そのようなユデトに近しく、しかし厳密に言うならば彼女にもなり損ねた存在として、Don Joanは強い印象を与える。それは、「自分の女性性を前面に出し敵将の欲望の対象として自らを提示しつつ、いざ事となると容易に男性性を表面化させて相手の首を切る」ユデトが男性性・女性性双方を身に帯び、適宜その間を行き来する存在であるのに対し、Don Joanは女性性のみを身に帯び男性性を剥奪されており、また、その男性性を自ら獲得することが叶わないからだ。

この点を踏まえるなら、Don Joanは、男性性・女性性の双方を行き来する形で自己呈示を行う一人の女性君主、すなわちエリザベス女王の陰画として解釈されうる存在だといえよう。例えば1588年に、スペイン無敵艦隊を迎撃するためにティルベリに駐屯していた部隊を相手とする彼女の演説は有名だが、同時代史料の一つ、ジェームズ・アスク (James Aske) 作の叙事詩‘Elizabetha Triumphants’では、彼女自身ではなく、駐屯地を訪問し終えた彼女が立ち去った後、部隊の将官が彼女の代わりに読み上げたものとされている (Mikalachki, 127)。つまり、アスクの論理において、エリザベス女王は、国王である自分をもつ象徴的な次元における軍隊の統帥権と、女王である自分ではなく将官達が実質的に担う軍隊の実際の次元における統帥権を区別し、前者を無理に行使しなかった点で、軍隊を前に自ら演説を行ったとされるポアディケアとは差異化されている (Mikalachki, 128-9)。だが同時に、他の同時代史料では、パラス・アテナの如く甲冑を身に纏った彼女がまずこの演説を部隊の前で述べ、翌日に彼女が出立した後、もう一度部隊の前で読み上げられたと記録されている (Marcus et al., 325, n.1)。このように異なる史料が存在するわけだが、いずれにせよ、この演説を述べること自体に関連してジェンダー的問題が細心の注意を払うべきものとして認識されていた点自体は指摘可能であろう。また、この演説内部で、彼女は自らのジェンダー的位置づけを操作している。以下、この演説の後半部分を引用したい。

I know I have the body but of a weak and feeble woman, but I have the heart and stomach of a king and of a king of England too—and take foul scorn that Parma or any prince of Europe should dare to invade the borders of my realm. To the which rather than any dishonor shall grow by me, I myself will venter my royal blood; I myself will be your general, judge, and rewarder of your virtue in the field. I know that already for your forwardness you have deserved rewards and crowns, and I assure you in the word of a prince you shall not fail of them. In the meantime, my lieutenant general shall be in my stead, than whom never prince commanded a more noble or worthy subject. Not doubting but by your concord in the camp and valor in the field and your obedience to myself and my general, we shall shortly have a famous victory over these enemies of my God and of my kingdom. (Marcus et al., 326)

上記引用箇所の冒頭の一文は余りにも有名な文章だが、ここで‘the body of a weak and feeble woman’と‘the

heart and stomach of a king'とは、なぜ並列されねばならないのだろうか。'Body'は肉体そのものを含意する言葉、'the heart and stomach'は身体器官を意味すると同時に精神的な含意をもつ言葉であり、両者が全く同じ位相にあるとは言い難い以上、前者を後者が全く打ち消すのは本来無理ではないだろうか。従ってここでは、話者が後者により前者を打ち消していると捉えるよりも、前者より後者を称揚していると考えの方が自然だろう。では、なぜ、後者は称揚されねばならないのだろうか。

それは、後者を称揚することにより「侵略」という行為がもつジェンダー的側面を封じ込め、同時に、「女王が、女王（女性）として、男性である兵士たちの戦意を高揚させる」という形で、自分が兵士・軍人たちの欲望の対象となることを回避しているからだとは考えられないだろうか。「侵略」の危険性を前に女性の身体をもつ人物が男性達の前で戦意高揚演説を行うことは、「守るべきものとしての国家・国土=女性の身体=女王」という図式を生み出すことにも繋がりをうる。従って、ここで「国王の(=男性の)精神」をもつ者として自らを明示することにより、エリザベスは、「パルマ公・スペイン国王」「イングランド軍の兵士」の双方の欲望をはらんだ視線を排除・切断し、侵略の危険性と身分制的な枠組みが揺るがされる危険性との双方を回避しているのだ。そして、その上で彼女は、実際の指揮官であるレスター伯が軍事的指揮権をもつことを述べている。

従ってここでは、「この軍の指揮権をもつ人物」として、まず「エリザベス女王 (female body)」、次いで「イングランド国王たるエリザベス ('the heart and stomach' of a 'king of England'をもつ)」、そして「エリザベスの代理たるレスター伯 (male body)」が段階的に提示され、その上で'concord'と'valor'が個別の兵士に求められるという形がとられている。この結果、エリザベス女王は、「女王=国土=外国君主・兵士らによる欲望や強姦の対象」という図式を回避しつつも「究極の指揮官であり、軍団を構成する男性を繋ぐ紐帯」として自己を提示する。この自己表象は、先に分析したDon Joanの提示のされ方と、全く逆である。本来は有能な指揮官であったドン・ファンは、その能動性を剥奪され、女性的なイメージを喚起することで軍団内の男性たちを繋ぐ紐帯となり、また、男性的な事業には何度も失敗するDon Joanとして作中世界に導入されているのだ。1588年のこの演説をもって1585年に描かれた*Lepanto*という詩をはかるのは当然ながら無理な話だが、しかし、ジェンダーの次元における自らの表象を操作する行為自体が同時代に存在し、従って、この詩を読む同時代人の念頭に、Don Joanとエリザベス女王がネガ・ポジの関係で浮かんでもおかしくないと指摘すること自体は可能であろう。

だが、なぜ、Don Joanという人物は、ここまでジェンダー化されえたのか。また、ヴェネチアという都市国家も、「男性性を剥奪された状態から脱しそれを回復する」という形で描かれえたのだろうか。いずれの場合も、モデルとなった歴史上の人物・都市国家とは全く異なる、しかしこの作品世界においては一貫性をもつ存在として造形されえたのはなぜか。それは、両者共にそのモデルが属していた歴史的な文脈を剥ぎ取られる形で造形されているからではなかろうか。連続する歴史を断絶し、「レパントの戦い」という一つの出来事により「ヴェネチア・トルコの相互関係」「スペイン・トルコの相互関係」等の全体を表象させる形で、この*Lepanto*という詩は構成されている。さらに、この「レパントの戦い」の表象は、その後の「プロテスタント・カトリック両勢力の関係」という、「レパントの戦い」それ自体とは無関係な事象を解釈するための雛形とされている。つまり、この詩において「レパントの戦い」という一つの出来事は、歴史上の出来事としてではなく、「オスマン帝国とカトリック勢力との間で行われたことは、カトリック勢力とプロテスタント勢力の間で行われることとなって回帰する」という循環を端的に表象するものと化しているのだ。ある一回限りの出来事を、その属す文脈から断絶させて捉え表象と化す操作が行われているからこそ、歴史上でそれぞれ固有の生を生きた、従って本来はその文脈から切り離しようもない人物達も変形され、この「表象」として選択された出来事を選択者が物語る際の枠組みに奉仕する存在と化していく。このように理解する時、序章で指摘した*Lepanto*という作品と「記憶の歴史学」の営為との相違点は、明確に認識されうるだろう。前述の、ジェームズ6世(1世)が構成するこの*Lepanto*という詩が、神聖同盟

側の発する言説への対抗言説という性格をもつものである点からも、また、「国王が発した言説」というそもその性格からしても、この詩は上からの歴史 Historyと同じ位相に属すものである。いや、それどころか、新たな形で上からの歴史Historyを語りだす装置だとすら言えるだろう。

周知のように、そのような対抗言説でありかつ上からの歴史 Historyを語りだす機能をもつ言説が、ジェームズ6世を国王として迎えることになるイングランドにも存在した——前述のスペイン無敵艦隊を巡る言説が、それである。この詩で提示された「歴史の雛形」が、まさにびたりと当て嵌まる集合的記憶が、イングランドには存在した。イングランド人の集合的記憶に照らしたとき、この詩は、イングランド人たちの「過去」をまさに示し、現在において再現するものとして読み込まれえたと考えられる。ここにおいて、神聖同盟側の発した言説の対抗言説としても、また、国王の発した言説としても、その正当性を主張し上からの歴史 Historyを提示していたこの*Lepanto*という詩は、その「決定的」性格を剥奪され、「無敵艦隊襲来の記憶」という別種の上からの歴史 Historyを語る言説によって飲み込まれる存在として、その姿を現すのだ。

そしてこのような視点に立つとき、疑問が生じる。歴史を連続的ではなく、むしろ文脈から切り離され表象と化された「出来事=記憶」をもって歴史をはかり、その「出来事=記憶」の回帰として捉えるという、歴史を断絶させて捉えるこの手法により描かれた上からの歴史 Historyを真に転倒させる術は無いのだろうか、上からの歴史 Historyを相対化しうるのは別種の上からの歴史 Historyのみなのだろうか、と。この疑問に対する決定的な答えなどあるべくも無かろうが、しかし、「記憶の歴史学」がもつ志向性、すなわち、あくまでも多声的なものとして歴史を認識し、しかも「再記憶化」を問題とすることにより、ある「正当な」記憶や出来事の「回帰」に関する上からの歴史 Historyを特権化する言説を事前に排除する志向性を、我々は想起すべきである。多声的な歴史認識とは、個々人の生が当然もちうる種々の限界、例えばその人の置かれた社会経済的・地理的な位置や生きえた時間の長さなどから生じる限界により、断片的なものとしてしか「社会」「歴史」を認識しえないという事実を真正面から捉えてこそ生じるものだ。特権的な立場から行われる社会・歴史認識の「断絶」を、個々人の生が当然もちうる限界から必然的に生じる「断絶」と、区別しないこと。次々と登場する上からの歴史 Historyを、常に、同時代に存在する多様な言説の束の中に捉え続けること、そこから決して逃がさないことは、記憶と未来の狭間に常に立ち続けて生きる我々にとり、大きな希望をもたらす営為ではないだろうか、と。

参考文献

一次史料・文献

- Von Klarwill, Victor (ed.), *The Fugger News-Letters. First Series*. 1970. Ed. Trans. Pauline de Chary. With a Foreword by H. Gordon Selfridge. Freeport, New York: Books for Libraries Press, 1924.
- Marcus, Leah h., Janel Mueller and Mary Beth Rose (eds.), *Elizabeth I: Collected Works*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 2000.
- Monga, Luigi (ed. and trans.), *The Journal of Aurelio Scetti: a Florentine Galley Slave at Lepanto (1565-1577)*. Tempe, Arizona: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2004.
- Nichols, John. *The Progresses, Processions, and Magnificent Festivities of King James the First*. Vol.1. New York: Burt Franklin, n.d.
- Rhodes, Neil, Jennifer Richards and Joseph Marshall (eds.), *King James VI and I: Selected Writings*. Aldershot: Ashgate, 2003.
- Sommerville, Johan P. (ed.), *King James VI and I: Political Writings*. Cambridge: CUP, 1994.

二次文献

- Appelbaum, Robert. 'War and Peace in *The Lepanto*.' *Reading Monarchs Writing: the Poetry of Henry VIII, Mary Stuart, Elizabeth*

- I, and James VII. Ed. Peter Herman. Tempe, Arizona: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2002. 179-214.
- Bell, Sandra J., 'Kingcraft and Poetry: James VI's Cultural Policy.' *Reading Monarchs Writing: the Poetry of Henry VIII, Mary Stuart, Elizabeth I, and James VII*. 155-177.
- , 'Writing the Monarch: King James VI and Lepanto.' *Other Voices, Other Vives: Expanding the Canon in English Renaissance Studies*. Eds. Helen Ostvich, Mary V. Silcox, and Graham Roebuck. London: Associated University Press, 1999. 193-208.
- Black, Jeremy. *European Warfare, 1494-1600*. London and New York: Routledge, 2002.
- Davis, Robert C. *Christian Slaves, Muslim Masters: White Slavery of the Mediterranean, the Barbary Coast, and Italy, 1500-1800*. New York: Palgrave Macmillan, 2003.
- Goldberg, Jonathan (ed.) *Queering the Renaissance*. Durham and London: Duke University Press, 1994.
- Goffman, Daniel. *The Ottoman Empire and Early Modern Europe*. Cambridge: CUP, 2002.
- Greene, Mary. *A Shared World: Christians and Muslims in the Early Modern Mediterranean*. Princeton, New Jersey: Princeton UP, 2000.
- Herman, Peter C. "'Best of Poets, Best of Kings": King James VI and I and the Scene of Monarchic Verse' *Royal Subjects: Essays on the Writings of James VI and I*. Eds. Daniel Fischlin and Mark Fortier. Detroit: Wayne State University Press, 2002. 61-103.
- Kahn, Coppélia. *Roman Shakespeare: Warriors, Wounds, and Women*. London and New York: Routledge, 1997.
- Lee, Jr., Maurice. *Great Britain's Solomon: James VI and I in His Three Kingdoms*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1990.
- Martin, Colin and Geoffrey Parker. *The Spanish Armada. Revised Ed.* Manchester: Mandolin, 1999.
- Matar, Nabil. *Islam in Britain, 1558-1685*. Cambridge: CUP, 1998.
- , *Turks, Moors, and Englishmen in the Age of Discovery*. New York: Columbia University Press, 1999.
- Mikalachki, Jodi. *The Legacy of Boadicea: Gender and Nation in Early Modern England*. London and New York: Routledge, 1998.
- Murrin, Michael. *History and Warfare in Renaissance Epic*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1994.
- Parker, Geoffrey. *The Grand Strategy of Philip II*. New Haven and London: Yale University Press, 1998.
- , *The Military Revolution: Military Innovation and the Rise of the West, 1500-1800*. 2nd Ed. Cambridge: CUP, 1996.
- Sanford, Rhonda Lemke. *Maps and Memory in Early Modern England: a Sense of Place*. New York: Palgrave Macmillan, 2002.
- Sharpe, Kevin. 'The King's Writ: Royal Authors, and Royal Authority in Early Modern England' *Culture and Politics in Early Stuart England*. Eds. Kevin Sharpe and Peter Lake. Houndmills and London: Palgrave, 1994. 117-138.
- Smith, Bruce R. *Homosexual Desire in Shakespeare's England: a Cultural Poetics*. With a new Preface. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1994.
- Stocker, Margarita. *Judith Sexual Warrior: Women and Power in Western Culture*. New Haven and London: Yale University Press, 1998.
- Vitkus, Daniel. *Turning Turk: English Theater and the Multicultural Mediterranean, 1570-1630*. New York: Palgrave Macmillan, 2003.
- , (ed.) *Piracy, Slavery, and Redemption: Barbary Captivity Narratives from Early Modern England*. With an introd. by Nabil Matar. New York: Columbia University Press, 2001.
- ビエール・ノラ (編)、『記憶の場 フランス国民意識の文化=社会史』第一巻(対立)、谷川稔監訳、岩波書店、2002年。